

國立政治大學日本語文學系

碩士論文

指導教授: 吉田妙子博士



形容詞の副詞的用法

—程度を表す用法を中心に—

研究生：吳安奇 撰

中華民國一〇三年七月

## 摘要

本研究旨在研究形容詞的副詞性用法，並以「すごく」、「ひどく」等語彙為研究對象，透過比較其形容詞語意上及句法上之差別，以及副詞性用法之異同，究明形容詞的副詞性用法中表示程度之用法。

本論文共分為五章。首先於序論中闡述本研究之目的與研究對象，第一章則針對過往與形容詞的副詞性用法相關文獻進行研究，並提出尚未解決的問題。而第二章則從語意面及句法面分析本論文研究對象以及各語彙間的異同。第三章則分析與研究對象共起之動詞，以及為何共起。第四章則比較形容詞的副詞性用法與一般程度副詞的差異。第五章為結論。

透過本研究可得知，除了作為形容詞時也具相當高程度性的「すごく」以及典型的程度副詞「非常に」「大変」外，其餘的研究對象在以副詞形使用時，會受到原先形容詞語意的影響。此外，因程度副詞與評價副詞具有連續性，故受語意強烈影響的語彙，其程度性較低，評價性則較高。

關鍵字：形容詞、副詞性用法、程度、評價、情態

# 形容詞の副詞的用法—程度を表す用法を中心に 要旨

本論文の目的は形容詞の副詞的用法を研究し、「すごく」「ひどく」などの語を研究対象として形容詞の意味的・統語的に比較し、さらに副詞的用法の異同について考察することを通して、程度を表す用法を明らかにすることである。

本論文は5章で構成されている。まず、序論で本研究の目的及び研究対象を述べる。そして、第1章は形容詞の副詞的用法についての先行研究を検討し、問題点を提出する。

第2章「形容詞としての研究対象」において、本論文の研究対象を意味の面、統語の面から分析して、各語の異同も論じる。第3章「形容詞の程度副詞的用法と動詞句」においては、研究対象と共起する動詞のタイプを分析し、そして何故このタイプの動詞と共起するのかを分析する。第4章「形容詞の程度副詞的用法と通常の種類副詞」は形容詞の程度副詞的用法と通常の種類副詞と比較する。最後の第5章は結論である。

本研究を通して、形容詞とする場合も程度性がかなり高い「すごく」と従来典型的種類副詞と視される「非常に」「大変」を除き、多くの語は副詞になると、元の形容詞の意味に影響されると考えられる。また、程度副詞は評価副詞とは連続性を持つため、語彙性に強く影響される語は程度性がより低い、評価性がより高くなると考える。

キーワード：形容詞、副詞的用法、程度、評価、モダリティ

## 目次

序論 .....	1
1 研究動機.....	1
第1章 先行研究および問題点 .....	5
1 飛田・浅田(1991)、(1994).....	5
2 小野(1997).....	5
3 仁田(2002).....	6
4 坂口(2010).....	6
5 先行研究の問題点.....	6
第2章 形容詞としての研究対象 .....	10
1 「すごい」 .....	10
2 「えらい」.....	14
2.1 意味の面から.....	14
2.2 統語の面から.....	17
3 「ひどい」 .....	19
4 「すごい」「えらい」「ひどい」の相違点.....	22
5 「すばらしい」.....	24
6 「おそろしい」 .....	25
6.1 「こわい」との意味の違い.....	25
6.2 「おそろしい」の統語的特徴.....	29
7 「いや(な)」 .....	31
8 「すさまじい」 .....	33
9 「たいへん(な)」と「非常(な)」 .....	35
9.1 「たいへん(な)」 .....	35
9.2 「非常(な)」 .....	37
9.3 「たいへん(な)」と「非常(な)」の相違点.....	38
10 「ばか(な)」 .....	40
11 まとめ.....	41
第3章 形容詞の程度副詞的用法と動詞句 .....	44

1	はじめに.....	44
2	形容詞連用形とすべき場合.....	44
3	共起する動詞のタイプ.....	48
	3.1 進展性に限界を持たない動詞.....	48
	3.2 内的情態動詞.....	53
	3.3 程度性のある静態動詞.....	57
4	まとめ.....	59
第4章	形容詞の程度副詞的用法と通常の程度副詞 .....	60
1	程度副詞の分類から.....	60
2	形態面からの分析.....	64
3	評価性からの分析.....	65
4	まとめ.....	71
第5章	結論 .....	72
1	結論.....	72
2	今後の課題.....	73
参考文献	.....	74



## 序論

### 1 研究動機

副詞の中には、「とても」「ゆっくり」「やっ」となどの活用のない語以外に、形容詞<sup>1</sup>由来のものが少なくない。それらの形容詞は連用形で副詞として述語を修飾している。しかし、同じ形容詞連用形であり、副詞的用法として使われるのに、何故異なる種類の副詞になるのであろうか。

- (1) 桜が美しく咲いた。 (作例)
- (2) そんな私を見てか、長嶺さんは、石けんを作っているなら写真を撮るといいと、撮影の合間にカメラについて丁寧に教えてくださった。  
(小幡有樹子『エブリディイズアグッドデイ』)
- (3) 彼は私の机の前の椅子に座り、何も言わなかった。ただ静かに泣いていた。  
(須藤八千代『ソーシャルワークの作業場』)
- (4) …だからたとえば、「私はあなたを憎んでいる」と「私はあなたを憎んでいない」は、内実がすごく似ている。  
(保坂和志『アウトブリードアウトブリード』)
- (5) 今日は五時から十時までの予定であるが、相変わらずなんにもものに通らなくて、ひどく気落ちしている。  
(木村梢『功、大好き』)
- (6) そして、彼女は私がものかきであることは知っているが、今まで私の本に興味を示したことがなかったので、私はつい油断して「彼女は美容関係の雑誌くらいしか読まない」などと書いてしまったのである。すると、珍しく彼女から手紙がきた。(中山庸子『賢い女は「おしゃれ」にこだわる』)
- (7) 筆者は幸いに医師としてこれまで何人かの方々の臨終の

<sup>1</sup>本稿では形容詞、形容動詞を総称して形容詞とする。

過程に付き添わせていただいた貴重な経験を得たが、死を迎えていく人々から教えていただいたことは、他の何物にも代えがたい学びの経験である。

(安藤治『福祉心理学のこころみ』)

- (8) 「いやだね、管理人といっしょに来てください。はじめて聞く声だし、こっちは危ない立場にいる人を預かっている。めったに開けられない」 (富島健夫『はだかの少女』)

(1)～(3)、(4)～(5)、(6)～(8)の下線部はそれぞれ後の動詞述語を修飾し、様態の副詞、程度副詞、文副詞として使われている。では、何故同じ形容詞の連用形であるのに、副詞的な表現になると異なる種類の副詞になるのか。

また、副詞になる場合、元の形容詞と意味が変わり、さらに程度や評価などの意味が含まれてくる。その中にはさらに、もとの意味が互いに異なる形容詞が連用形になると、類似の意味になるようなものもある。例えば「すごく」「ひどく」「えらく」「恐ろしく」「すさまじく」「すばらしく」「大変」「ばかに」「非常に」「いやに」などである。飛田・浅田(1991)(1994)は各語の意味を以下のように取り上げる。<sup>2</sup>

えらい：人や行為が立派で、賞賛や尊敬に値する様子を表す。「(「ぼく、大きくなったらえらい人になるよ。)」また、社会的地位が高い様子を表す場合もある。「(そんな心がけではえらくなれない。)」さらに、物事が困難な様子、あるいは困難で大変な様子を表すこともできる。「(泣かないで我慢したのはえらかったね。」「やれやれ、えらい目にあった。)」

おそろしい：恐怖や不安を感じる様子を表す。「(暗い夜道を一人

<sup>2</sup> 「えらい」から「ばか」までは飛田・浅田(1991)『現代形容詞用法辞典』による記述である

で歩くのはおそろしい。」)また、事態の大きさを客観的に表す現代語用法もあり、驚きを誇張して表現する語であって、やや揶揄的なニュアンスが含まれている。「彼女の子供、四人とも名門小学校なんですって」「オッソロシー」)

すごい：非常に恐ろしい様子を表す。具体的に何がどのように恐ろしいのかまで言及しておらず、非常に主観的に恐怖を述べるニュアンスがある。「事故現場はあまりにもすごくて息が止まりそうだ。」)

ひどい：残酷で無情な様子を表す。「恋人との約束を破るなんてひどい人ねえ。」)また、非常に悪い様子を表す場合もある。「このホテルは外見は立派だが設備がひどい。」)

すばらしい：非常に優れていて感嘆すべき様子を表す。プラスイメージの語。「彼のピアノはすばらしい。」)

すさまじい：非常におそろしい様子を表す。マイナスイメージの語。「恐怖映画のすさまじいシーンに肝をつぶした。」)恐怖を感ずるほど程度がはなはだしい様子を表す。ややマイナスよりのイメージの語。「風雨があまりにすさまじくて、表に出られない。」)

たいへん：対象の状態が慨嘆すべきであることを誇張的に述べ、慨嘆・危惧・同情・驚きなどの暗示がこもる。「娘の恋人を調べてみたらたいへんな男だった。」「タバコを吸ってるのがママに**ばれたらたいへんだ**。」)

ばか：知的な能力や理解力・判断力がたりない様子を表す。「どうせあたしは**ばかな**女よ。」)また、本来の機能を果たさない様子を表す。「ドアの鍵が**ばか**になっていて、よく閉まらない。」)

ひじょう<sup>3</sup>：通常でない状態を表す。「非常の○○」「非常○○」

---

<sup>3</sup> 『現代副詞用法辞典』 p443 による



の形で名詞を作ることが多い(「このドアは非常の場合にのみ開きます。」)

いや(な): 物事や人を不快に感ずる様子を表す。原則としてマイナスイメージの語。主観的な嫌悪を表し、はっきりした理由はないことが多い。(「あんな女の顔を見るのもいやだ。」) 否定の返事または接続詞となる。(「三百人、いや四百人以上集まったんだって。」)

以上の記述から見ると、これらの語は各々異なる意味があると認められるが、連用形になって副詞として使われると、みな程度の甚だしいことを表すようになる。

(9) 今日はずごく／えらく／ひどく／恐ろしく／すばらしく／すさまじく／大変／ばかに／非常に／いやに暑い。(作例)

以上の記述だけでは、形容詞とする場合がみな違う意味を持っているのに、何故副詞的に使われる場合は同じく程度のはなはだしいことを表すことができるのかは分からない。また、(9)のように連用形で形容詞を修飾し、程度が高いと意味することができるこれらの語が互いに入れ替えられない場合、つまり各語の特徴と他の語との異同について意味的面と統語的面から見た考察は管見の限りほとんどないと思われる。したがって、本稿はまず各語の形容詞を意味的・統語的に比較して、何故これらの語にそのような現象が起きるのか、さらに各語の異同についてを考察し試みたい。

## 第1章 先行研究および問題点

### 1 飛田・浅田(1991)、(1994)

前述したように、飛田・浅田(1991)(1994)は各語についての意味や特徴を指摘しているが、各語が副詞として使われる際の、〈程度がはなはだしい〉ことの意味についてもいくつか触れている。例えば、程度を表す「すごい」については、「ひどい」と比べ、後者は被害者意識が暗示されているが、前者はないと述べている。また、「おそろしく」と「えらく」についての相違点を例文で説明し、「おそろしく／えらく寒い」はいずれも程度を表すが、前者は「こごえ死にそうだ」、後者は「手袋がほしい」などの文が後接する可能性があるとしている。さらに、「ばか(な)」は「非常に」「たいへん」と異なり、誇張するニュアンスがあり、主観的な表現になっているとしている。

### 2 小野(1997)

小野(1997)は「ひどい、えらい、おそろしい、いや(な)」などの形容詞には連用形における意味的中立化という特徴を持っている、としている。これらの語は連用形が相反する語彙的環境において共起可能となっており、元の形容詞の基本義とでもいうべきものが失われていると指摘している。また、当該の形容詞が現代語として、プラスあるいはマイナスの意味としてかなり固定した意味を持っているとも主張している。つまり、プラスの意味の「えらい、すばらしい」などやマイナスの意味の「ひどい、おそろしい、すさまじい」などが連用形で「えらく金持ちだ／貧乏だ」「すばらしく賢い／馬鹿だ」、「ひどく喜んだ／悲しんだ」「おそろしく大きい／小さい」「すさまじく高い／安い」のように相矛盾するペアの用例が可能である。また、これらの形容詞が、連用形で意味的中立化をするとき、程度副詞的な意味になってくると指摘している。

### 3 仁田(2002)

仁田(2002)によると、「すごく」「ひどく」「えらく」は純粹程度の副詞であり、評価性に属する移行・派生型の程度の副詞でもある。

仁田(2002: 159)は、「すごく」「ひどく」「えらく」などは程度副詞としての使い方があるとともに、元の感情・感覚・評価を意味する形容詞としての使い方も存在すると指摘している。しかし、程度副詞的に使われた場合、形容詞の持っていた感情や評価などの意味は抑えられたり、希薄化させられたりしているとも述べている。また、このような語彙は、形容詞の有している感情・評価に関わる語彙的意味を色濃く帯びながら、高程度性の程度限定を行っているものであると主張している。

### 4 坂口(2010)

坂口(2010)は「すごく、ひどく」は共に程度がはなはだしいことを表し、「たいそう、とても」と似ているが、これらの語は他の活用形を持ち、意味も変わらないから、品詞としては副詞ではなく、形容詞連用形と考えるべきであると主張している。その点については現行の辞書辞典の記述とは異なり、矛盾する部分もあるようである。また新聞における用例を収集し、語と語の相互承接(たとえば「すごくひどい」や「非常に大変」など)の現象を表で表している。結論としては、「すごく、ひどく、おそろしく」などは形容詞の連用形とし、「いやに」は副詞と位置付けるのが良いと述べている。

### 5 先行研究の問題点

飛田・浅田(1991)は、これらの語は程度のはなはだしいことを表していると主張しているが、それだけでは説明不足だと思われる。また、「ひどい」に暗示されている被害者意識は「すごい」にはないと述べている。しかし、それだけでは以下の例文を説明できない。

(10) 「でも、いっしょにお昼を食べたからといって…」フレ

ミング夫人がひどくやさしい口調でいった。「かならずしも、ユーステス卿の愛人だったとはいえないんじゃないでしょうか？」

(アントニイ・パークリー『毒いりチョコレート事件』)

(10)のフレミング夫人がやさしい口調でいったことが、聞き手に被害者意識をもたらすとはどう考えてもありえない。それに、この「ひどく」は形容詞の元の意味の残酷で無情な様子、あるいは非常に悪い様子でなく、ただ程度を表していると言えよう。

また、興味深いのは、形容詞の場合に入れ替えられる「えらい」「ひどい」「大変」は、副詞的に使われると入れ替えられなくなる。

(11) えらい／ひどい／大変な目にあった。

(12) \*えらく／\*ひどく／\*大変申し訳ありません。

(12)から分かるように、これらの語は程度のはなはだしいことを表すと共に、また異なる部分があると思われる。また、「ばか」についても、程度のはなはだしいことを誇張するニュアンスがあり、やや主観的な表現になっていると記述しているが、「非常」についても話者の主観としての程度が通常の状態を超えてはなはだしいことを誇張するニュアンスがあると記述している。しかし、両者の異なるところがどこにあるのか分からない。

また、本稿の研究対象は確かに程度副詞として使われる場合に、元の形容詞としての意味が含まれる場合があるが、仁田(2002)の分析についても、単に例文を見るだけでは、評価性をもっているか否か、また、連用形で述語を修飾する場合、形容詞としての意味は残っているか否かなどは判断できない。

(13) 涙は出てなくても、私にはそういう気持ちがすごくわかります。みんなにはわからなくても、私には、見えない

母の涙が見えてくるのです。私は、このごろこう思うようになりました。

(中林重祐『会いませんか？話ませんか？』)

- (14) ノルトハイムの夫婦が酔っぱらいたちにすごく腹を立てていた。酔っぱらいたちは隣の酒場を出たあと、決まって郵便受けにおしっこをひっかけていった。

(ロルフ・ヴィルヘルム・ブレードニヒ『悪魔のほくろ』)

- (15) 淡紅色の羽がところどころ車の排気ガスで煤けていたし、ひどく痩せてもいたけれど、とにかく全体として淡紅色を保ち、淡紅色でもって世界から超然としていた。

(辺見庸『ゆで卵』)

- (16) これは先例は幾つもありまして、時間がありませんから、またそれを論議しようというのじゃありませんからよけい申し上げませんが、キューバからアメリカのマイアミの飛行場に亡命機が飛んできて、着陸してしまっただけでその後になってわかったという、あれほど完全な装備をしておるはずのアメリカだって国防省自体がえらくびっくりした。(国会会議録)

(13)～(16)は一見程度を表していると思われるが、評価性も含まれていると言えよう。「すごく」「ひどく」「えらく」は程度も評価も表すことができるが、通常の数詞とはどのように異なるかについてはさらに分析する必要があると思われるので、それについては第4章で考察する。

また、坂口(2006)の新聞における用例は形容詞の場合しかなく、動詞を修飾する例はほとんどない。動詞を修飾する場合を除き、形容詞が後接する用例だけ見るのでは、分析の結果が正しくなくなる恐れがある。また、品詞の判別に止まれば、「すごく」「ひどく」などの語に含まれている評価性は見えなくなる。さらに、「すごく／ひどく」などの例で「すごく」と「ひどく」は入れ替えられる場合が

あると述べているが、入れ替えられない場合もあるのに、それについての説明はない。

先行研究はいずれも副詞形になる各語の異同を分析しているが、元の形容詞の意味と統語的特徴を分析せずにすませるなら、これらの語が正しく捉えられないのではないだろうか。小野(1997)は形容詞連用形が意味的な中立化をすることを指摘しているが、基本義との関係、意味変化のメカニズムは、未だ充分明らかになっていないわけではなく、さらに考察する必要があるとも述べている。そこで、本稿は先行研究を踏まえ、まず各語の形容詞を意味・統語から分析し、さらに副詞形と動詞との共起関係を研究する。



## 第2章 形容詞としての研究対象

### 1 「すごい」

飛田・浅田(1991)によると、「すごい」には三つの意味特徴が含まれている。

特徴1： 非常に恐ろしい様子を表す。……「おそろしい」に比べて、受ける恐怖が感覚的で、具体的に何がどのように恐ろしいのかまでは言及しておらず、非常に主観的に恐怖を述べるニュアンスがある。…しばしば、恐怖の他に驚き・憤慨などの別の思い入れが加わり、客観的な恐怖を表す文脈においてはふつう用いない。

特徴2： 程度のはなはだしい様子を表す。原則としてプラスマイナスのイメージはない。……かなり俗語的で、日常会話中心に用いられ、かたい文章中では用いられない。……

特徴3： 意味2から一歩進んで、感動詞的にまたは述語として用いられ、感嘆・驚き・あきれなどの気持ちを表す。ややプラスよりのイメージの語。

一般的に、特徴1のような〈非常に恐ろしい〉という意味は「すごい」の基本義と認められている。しかし、一見同じ〈恐怖を感じる〉という共通点を持つ「恐ろしい」と「すごい」には異なるニュアンスが含まれている。

- (1) この「突然変異ウィルス」。不幸にも感染してしまった人にとっては恐ろしい/\*すごい存在だろう。

(加藤良平『遺伝子工学が日本的経営を変える!』)

社会的な評価性と共感覚を持つ「おそろしい」と比べると、「すご



い」は個人的な評価性を表すと思われる。また、「おそろしい」のように純粋な恐怖だけを表すのではなく、「すごい」には驚きなどの感覚も含まれていると思われる。

個人的で、かつ驚きも含まれている〈恐怖を感じる〉意味以外に、「すごい」も特徴2のように、程度の甚だしさを表すことができる。

- (2) ザーザーと降っていた、あのすごい雨も、いつのまにか上がったようです。 (郡司ななえ『がんばれ！盲導犬ベルナ』)
- (3) そおっと顔を出したカケル目がけて暗い空から青いひとかかえもある毛玉のようなものが、すごい勢いで回転しながらふってきたのだ。 (速水彩『青いブリンク』)
- (4) 都市部における嫌煙の動きは、ご存じのとおり非常に厳しく、またすごいスピードで取り締まりが強化されていった。(小林至『不幸に気づかないアメリカ人幸せに気づかない日本人』)

特徴1から〈非常に〉、〈桁外れ〉の意味を引き出したのは特徴2の「程度が甚だしい」である。特徴2の「すごい」はよく程度性のある名詞と共起しており、もとの〈驚くほど〉という意味も含まれていると思われる。さらに、特徴3のように、「すごい」も話者の感嘆、驚きなどの気持ちを表している。しかし、述語とする場合だけではなく、装定用法で表現することもできると思われる。また、その場合、文脈によって、「すごい」は異なる意味を表すことができる。

- (5) 「オジサマこそ、驚いたわ。まア、スゴイ服、着てらっしゃるじゃないの。靴も、帽子も…」 (西尾(1983: 152))

西尾(1983)では程度を表す「すごい」の対象が〈こと〉だけでなく、〈もの〉でも可能であると指摘し、さらに、(5)について以下のように説明している。



「…これは、たとえば「すごくりっぱな服」「すごく上等な服」  
といったような、「すごく」の限定する語が「すごい」の中に包  
摂されたような表現だと考えることができようか。」

つまり、「すごい」が用いられる場合に共通するのは〈程度が甚だ  
しいこと〉であり、「何の程度が甚だしいのか」は文脈で推測するし  
かない。

さらに、特徴3の場合、好ましい内容について用いることが多い  
と指摘しているが、それは文脈によって決まると思われる。例えば、  
「あの人、すごい」と聞くと、「あの人」に対するいい評価、悪い評  
価いずれにも感じられる。つまり、「すごい」はただ話者個人にとっ  
て、〈程度が甚だしい〉という意味しか表さないと思われる。また、

- (6) すごい目つき→目つきがすごい。（「鋭い」）
- (7) すごい事故現場→事故現場がすごい。（「凄惨」）
- (8) すごい人波→人波がすごい。（「多い」）
- (9) すごい勢い→勢いがすごい。（「大きい」）
- (10) すごい腕→腕がすごい。（「よい」）
- (11) すごい写真→写真がすごい。（「優秀」）

これらの例では話者が畏怖、威圧感で圧倒されるようなニュア  
ンスが含まれ、「鋭い」と入れ替えられる(6)と話者が恐怖を感じ、〈凄  
惨〉という意味を表している(7)はややマイナス評価である。(8)、  
(9)は話者が驚きで圧倒されるという意味を表し、それぞれ「多い」、  
「大きい」と置換できるが、評価性のないゼロ評価であると言える。  
(10)、(11)も「よい」「優れた」などの形容詞と入れ替えられ、プ  
ラス評価であるが、話者にとって感嘆・驚きなどのニュアンスを伴っ  
ていると思われる。したがって、「すごい」の意味は被修飾名詞の語  
彙性に左右されるが、〈程度が甚だしい〉という基本義は含まれてい  
ることになるであろう。

さらに、面白いことに、(12)(13)が示したように、同じ「添加物はすごい」という文では、異なる意味で説明することができる。

(12) 購買部のパン買いたいけど添加物がすごいんだよなあ。

(Yahoo!知恵袋)

(13) 添加物はすごい。魔法の粉だ。暗い土色の原料タラコ。添加物の液に一晩漬けると赤ちゃんの肌のようなプリプリのタラコに変貌する。

([https://www.facebook.com/permalink.php?id=162790237188674&story\\_fbid=189089711225393](https://www.facebook.com/permalink.php?id=162790237188674&story_fbid=189089711225393))

(12)の文脈によると、話者は「添加物がたくさんある」という意味で、〈量・程度〉の表現であるが、〈量が多い〉だけではなく、添加物に対する話者の嫌悪の気持ちが現れている。(13)は感嘆・驚きの気持ちを表していると思われる。その点から見ると、「すごい」は同じ対象でも文脈によって評価が反対になる。もともと評価形容詞と視される「すごい」は、拡張義で用いる場合、〈程度が並外れている〉という意味で使われていることもあるが、近年「すごい速い!」「すごい可愛い!」などの形容詞形で形容詞を修飾する日常的な言い方もよく聞かれる。

したがって、本稿は同じく話者の主観的な気持ちを表す飛田・浅田(1991)の特徴1と特徴3に基づき、「すごい」には以下の二つの意味特徴が含まれていると考える。

意味特徴1: 話者にとって、被修飾語は程度が甚だしく、並外れている。

意味特徴2: 話者の主観的な感嘆・驚き・恐怖などの気持ちを表している。

## 2 「えらい」

梶原(2012)は「えらい」の意味分析をし、別義を五つ指摘しているが、別義が相互にどのような関係になっているかなどに関する説明はない。何故「えらい」は基本義の〈優れている〉、〈人として偉大だ〉から拡張義の〈並々ではない〉、〈程度が並外れている〉へと派生しているのか。

また、増井(1991)は「えらい」の意義変化の過程について、近世前期宝暦年間から現代への跡付けを考察している。その結果、現代において〈立派である、地位が高い〉といった意味と〈程度が甚だしい〉という意味が両方が用いられているが、近世は専ら後者の意味で用いられ、近世前期は〈程度が甚だしい〉という意味を表し、幕末から明治に至って現代語と同様の意味である〈立派だ、優れている〉として用いられている、としている。本節ではそのような「えらい」の意味的、または統語的な特徴を分析する。

### 2.1 意味の面から

「えらい」の意味分析について、梶原(2012)は「立派だ」と比べ、「えらい」の多義的別義を次のようにまとめている。

別義①：〈話題の人間やその行動が〉〈普通の人間と比べ〉〈行為の質が上だと捉えられるさま〉

別義②：〈話題の人間が〉〈普通の人間と比べ〉〈社会的に上だと捉えられるさま〉

別義③：〈話題の対象が〉〈話者が予想する標準値から〉〈大きく離れていると〉〈捉えられるさま〉

別義④：〈話題の人物や事柄が〉〈社会的規範から〉〈外れていると〉〈捉えられるさま〉

別義⑤：〈話題の行為が〉〈肉体的に困難であると〉〈捉えられるさま〉

(梶原(2012: 24))

梶原(2012)はそれぞれの別義に当てはまる例文を取り上げていないため、筆者が以下の「えらい」の例文をあげてみる。

(14) 三つめは、以上の二つのことを土台としてその上に、子どもに日本で一番えらい“人”は天皇であることを、手を替え品を替えて教え込もうとしていることです。

(増田孝雄『政治と教育のあいだ』)

(15) 小学校でよい成績をとるたび、親は「まあ、えらいじゃないの！」と飛び上がって喜び、近所にも親戚にも自慢していました。(水澤都加佐『「もえつき」の処方箋』)

(16) 特に日本に向けて、遺伝子組み換え食品は安全だという意識をつくるための広報費用まで、えらいお金を用意している。(『国会会議録』)

(17) 現場はえらい人だった。(作例)

(18) 彼は、美代子の顔を眼にうかべながら、心で夢中で繰り返していた。えらいことになった…、えらいことになった…おれは、きっと殺される。(椎名麟三『作家の自伝』)

(19) おきぬはんがうちへ初めて品物を売りに来はったのは筭、左の頬にえらいあざをこさえてはりましてなあ。

(澤田ふじ子『見えない橋』)

(20) 「農業はえらいから、娘は農家の嫁にはしない」とも思っていました。

(『日本の宝=水田を生かして新しい産地づくり』)

(21) 母親に捨てられた過去を女の子たちに話すことで適当にいい気持ちになっていた俺とはえらい違いだ。

(村山由佳『天使の梯子』)

(22) だって停電して真っ暗になっちゃったのよ。みんな騒ぎだすはずでしょう？ホテルはほぼ満室だったし、そんなことになったらえらい騒ぎになってるはずですよもの。

(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』)

- (23) 高校がほぼ全入に近くなっているのに、その中途脱落者がえらい勢いで増えているというのは、世の中の責任はともかく、いったい家庭でどんな教育をしてきたのかと考えるようになります。(加山雄三『この愛いつまでも』)

以上の例文を梶原の別義の分類に当てはめると、(14)は別義①、(15)は別義②であるが、二文とも語彙的な意味を完全に備えた基本義であると思われる。そして、(16)～(19)は別義③に属し、それぞれ「お金がたくさんある」「人が多い」「大変なこと」「あざがひどい」という意味を表している。さらに、(20)は別義⑤であると判断でき、農業は〈大変だ、疲れる〉から、娘を農家の嫁にしたくないという意味である。(21)～(23)は〈量の程度が高い〉ということで、(16)と(17)と同じく別義③に分類されうる。また、梶原(2012)はそれぞれの別義の例文を挙げておらず、別義④に相応しいものは見つからない。さらに、ただ辞書での記述を検討するだけで、意味的と統語的側面から分析しないと、単語を全面的に捉えられない恐れがある。したがって、梶原(2012)の分析を基にし修正して、本稿では多義語の「えらい」について以下のように分類し、さらに統語的な面も含めて考察する。

意味 1：話者にとって、人間の性格、行動、業績が優秀で、立派である。

意味 2：主題は話者の予想する標準値から、大きく離れている。

意味 3：話者にとって、主題は肉体的に困難である。<sup>4</sup>

基本義の意味 1 の修飾対象を拡張すれば、程度性がある抽象名詞と共起する場合、その名詞が話者の予想以上の程度にある、つまり、

---

<sup>4</sup>意味 3 は関西方言であるが、一つの意味として分類する。

程度が並でないということになる。この認知プロセスがあるため、「えらい」は意味2のように、程度がはなはだしいことを表すようになると言えよう。さらに、意味1の修飾対象をメトニミーによって人間の〈肉体〉だけを焦点におけば、その〈肉体〉に予想以上の苦痛を与えるという意味を帯びるようになる。

何故「えらい」という言葉に「人が立派だ」という絶対的プラス評価の意味と、「肉体的に苦痛だ」という絶対的マイナス評価の意味が含まれるのか。これは増井(1991)のように通時的に考察しないと断言できないが、現代の用法を評価の視点から見ると、(14)から(23)の「えらい」は述定用法、または装定用法で被修飾名詞が「人」である場合は「立派だ」「つらい」という基本義で使われるが、装定用法になると基本義の評価性が薄れて程度性が強くなっていることがわかる。にもかかわらず、(14)(15)、(18)～(20)の「えらい」はものの〈質〉を修飾している共通点を持っていると思われる。一方、(16)(17)、(21)～(23)の「えらい」は以上の例文と異なり、ものの〈質〉ではなく、〈量・程度〉を表すことも明らかである。

したがって、以上の分析から見ると、「えらい」は基本義で質的側面を表しているが、拡張義で量的側面を表していると思われる。物には〈質〉と〈量・程度〉という両側面があるが、形容詞にもそのような特性がある。ただ、(21)～(23)のような場合、「えらい」の〈質〉が薄れ、量的側面が焦点になる。それゆえ、〈量・程度〉の「えらい」はプラス・マイナスの意味が含まれず、〈量の程度が甚だしい〉ことしか表さないとと言える。

## 2.2 統語の面から

「えらい」は前述したように、人格、行動、業績などの優秀さ、さらに程度のはなはだしさなどの用法が含まれている。また、修飾対象の名詞の抽象度が高いほど、量・程度表現として使われる場合



が多いと言える。<sup>5</sup>

さらに、面白いことに、「えらい」は意味1と意味3で使われる場合、装定用法（つまり、「えらい○○」）と述定用法（○○はえらい）のいずれも持っているが、意味2で使われる場合は装定用法しかないようである。

(24) えらい小学生→あの子はえらい。(意味1)

(25) えらい学者→あの学者はえらい。(意味1)

(26) えらいあざ→\*あのあざはえらい。(意味2)

(27) えらい騒ぎ→\*あの騒ぎはえらい。(意味2)

(28) えらい農業→農業はえらい。(意味3)

語彙的観点から見れば、(24)(25)(28)はプラスかマイナスの評価があるが、(26)(27)はプラスもマイナスもない、つまりゼロ評価である。しかし、何故〈人間〉や〈人間の行動〉などに関わっていない意味2は述定用法で用いられないのか。

日本語の形容詞は一般に装定用法も述定用法も持っている。また、装定用法は形容詞の本来的機能であり、述定用法は二次的なものであると思われる（湯(2012:246)）。湯(2012:256)はさらに以下のように指摘している。

「…装定・連体用法は主に修飾する主要部名詞の〈内的属性〉や、〈内的生理〉〈心理状態〉について叙述することが多い」

確かに、(24)(25)(28)の「えらい」は話者は「小学生」「学者」「農業」の本来的に内包していると考えられる性質・属性を引き出して、評価を与えていると思われるが、(26)(27)はどうであろうか。

---

<sup>5</sup>それについて、森田(2001:32)では、「えらい」と被修飾語とは、「修飾することによって、被修飾語の意味との相互作用で、意味の具体性が形骸化していく」と述べている。

「えらい」は意味1が基本義であり、〈人間〉あるいは〈人間の行動〉と関わっている。したがって、装定用法では、〈人間〉あるいは〈人間の行動〉を限定・修飾している。この場合、述定用法では、話者は修飾語に対する評価を与えることになる。一方、「えらい」は意味2で使われる場合、被修飾語には量・程度概念が含まれていなければならないと言えよう。したがって、程度性のある名詞と共起するのが「えらい」の意味2として用いられる前提であると思われる。しかし、意味2の述定用法は不適格である。装定用法とは異なり、述定用法は通常感情を表す性状語と共起している。仁田(1998)でも形容詞を属性、評価・判断、感情・感覚と分類しており、それぞれの述定、装定用法について調査している。その結果、属性形容詞は用法の中心が装定であり、評価・判断と感情・感覚形容詞は述定が装定を上回ると指摘している。それ故、「えらい」は述定用法で使われると、評価の意味が含まれているため、評価という意味しか現れていない。しかし、量・程度を表す「えらい」と共起する被修飾語は、〈人間〉あるいは〈人間の行動〉などとは関わらず、共起できなくなるのも当然であろう。

### 3 「ひどい」

「ひどい」は「非道」を形容詞化したものであり、漢字も「酷い」や「非道い」で表されている。一般的にも、「ひどい」の基本義は〈道義に外れて残酷である〉とされている。例えば、「あの人、ひどい」と聞くと、必ず「あの人」の残酷で無情な様子を思い浮かべ、マイナス評価になる。さらに、「えらい」と同じように、程度性を持つ抽象名詞を修飾する場合、程度を表し、元のマイナス評価が加わり、修飾対象を〈非常に悪い〉ものと評価づけることになる。また、〈非常に悪い〉の〈非常に〉をプロファイルすると、〈程度がはなはだしい〉とさらに拡張される。

また、修飾対象について、(29)～(32)のように、人間の生理や心理の不快や苦痛と共起することが多い。それに、(33)(34)のように



自然現象の悪い様子も修飾できる。

- (29) 私も、妊娠中肉を食べてひどいつわりを起こしたのです。  
(ジェニー牛山『病気知らずの食べ方があった』)
- (30) 「ひどい二日酔いで、ずっと寝ていた日だったかもしれない」  
(中村邦生『月の川を渡る』)
- (31) 顔面の筋緊張が強く、顔全体が突っ張ったようになり目が異様に強く見開いている。ひどいストレスが持続して解消されず、心労が極値に達しているのが一目でわかった。  
(大草正信『学校心理士の実践』)
- (32) ことに私の場合、体が弱いほうだから、落ち込みもひどい。こんなことを、もう何十回も経験しながら、いまだに私は自分の体のリズムがつかめないでいる。  
(谷沢永一『ビジネスマンのための宮本武蔵五輪書』)
- (33) 朝からひどい土砂降りであった。ホテルの窓から見ると、徳島市街がけぶっている。(内田康夫『藍色回廊殺人事件』)
- (34) タソックという革が雨に濡れて滑りやすい上に、マタガーリというイバラの灌木のトゲが痛い。その上にひどい湿気だから、グース・ダウンのジャケットと防水の雨具を着こんでいた僕は汗まみれだ。  
(大藪春彦『小説すばる』)

以上の例文から見れば、「ひどい」と共起している名詞はマイナスの意味が含まれるものであるが、(35)の「状態」、(36)の「顔」、(37)の「言葉」など評価性を含まない無標の名詞をも修飾して、マイナス方向に評価づけることもできる。

- (35) 健ちゃんは今、戦っているんだ、と思いました。皮膚がひどい状態で、ストーマーをどうするのかも悩みでした。  
(重田さゆり『13歳の遺言』)

- (36) しばらく僕らは顔を見合わせていました。きっとその頃僕はひどい顔をしていたんだと思います。

(村上春樹『レキシントンの幽霊』)

- (37) 「…でも、記憶にはしっかり残ります。自分がどれほどひどい言葉を相手に投げつけたかという、明確な記憶が。…」  
(吉村達也『スイッチ』)

西尾(1983)によると、拡張義で使われる「ひどい」は「中心的な意味が弱まり、程度の大きいことが主な要素になっている」が、「まだそのことを受ける人間にとって被害のあることをも表しており、完全な程度の表現とは言い切れない段階であろう」。そして、「ひどい」を程度表現の語とする例文をも取り上げている(西尾(1983: 148))。つまり、「ひどい」には話者の被害意識を表す〈非常に悪い〉と〈程度が甚だしい〉という二つの拡張義を持つと暗示している。しかし、どんな場合が〈非常に悪い〉、〈程度が甚だしい〉を表すのかははっきりしていない。

- (38) ひどい扱い→扱いがひどい。(作例)  
(39) ひどい汚染→汚染がひどい。(作例)  
(40) ひどいショック→?ショックがひどい。(作例)  
(41) ひどい騒ぎ→?騒ぎがひどい。(作例)

(38)のように、一般的に修飾対象がマイナスイメージもプラスイメージもない場合、「ひどい」は〈非常に悪い〉を表している。一方、(39)のように、修飾対象にマイナスイメージが含まれている場合、〈程度が甚だしい〉ことを表している。さらに、(40)(41)のように〈程度が甚だしい〉ことを表す場合、装定用法は使われるが述定用法は使われないようである。

#### 4 「すごい」「えらい」「ひどい」の相違点

前述したように、〈量・程度〉の「えらい」はプラス評価かマイナス評価を含まず、単に〈量の程度が甚だしい〉ことしか表さないが、「すごい」も意味が被修飾名詞の語彙的意味に左右されると思われる。一方、基本義が強い「ひどい」は〈量・程度〉を表す場合でも、主にマイナス評価を表している。本節では、「すごい」「えらい」「ひどい」を比較し、それぞれの相違点を分析する。

(42) すごい / えらい / ひどい 叱り方だ。 (作例)

(43) 「もしかして、ひかるは殺人鬼かもしれないぞ」柿沼は、言っておいて、にやっと笑った。「やめてよ」おくびょうなひとみが、悲鳴をあげた。「もしそうだったら、これはえらい ( / すごい / ひどい ) 事件だぜ。殺人女子高生なんて…」天野は、矢場の顔をちらちら見ながら言った。

(宗田理『ぼくらの「第九」殺人事件』)

(42)(43)を見ると、同じ修飾語であるが、それぞれのニュアンスが異なる。(42)の叱り方の程度の高さを装定用法で修飾する場合、三語はいずれもできるが、「すごい／えらい叱り方」は怒鳴ったりして相手を驚かせるなど外部に向けた攻撃的態度を伴う状況で使われるのに対し、「ひどい叱り方」は相手の心を傷つけたりして、相手に〈被害〉を与えるという陰湿な叱り方が想像できよう。また、(43)の「えらい事件」はよく誰かが怪我したり命を失ったりした場合に使われる。「ひどい事件」もこのような場合に使われるが、〈話者が被害にあう〉ことを焦点として、事件の残酷さを表すと思われる。一方、「すごい事件」は話者が感嘆・驚きなどの気持ちだけを表し、事件はプラスかマイナスかは関わらないと思われる。

(44) ?すごい / えらい / ひどい 叱責

→叱責が ?すごい / \*えらい / ひどい。

- (45) すごい／?えらい／\*ひどい 賞賛  
→ 賞賛が すごい／\*えらい／\*ひどい。
- (46) ?すごい／えらい／ひどい 目にあう。
- (47) すごい／えらい／ひどい ことになる。
- (48)a 今度悪く言ったら、後で?すごい／ひどい／\*えらいぞ。  
b 今度悪く言ったら、後ですごい／ひどい／えらいこと  
になるぞ。

さらに、(44)、(45)から分かるように、「すごい」はマイナスイメージの「叱責」と共起するとやや不自然であるが、プラスイメージの「賞賛」とは共起できる。「えらい」「ひどい」は逆に「叱責」と共起できるが、「賞賛」とは共起できないと思われる。したがって、「すごい」の評価性は修飾語または文脈で決まるが、プラスイメージの被修飾語と共起するのが自然であると言えよう。(46)のマイナスイメージの「目にあう」と共起できないことも同様の事情からである。一方、「えらい」「ひどい」はマイナスイメージの被修飾語と共起する場合が多いと思われる。<sup>6</sup>

また、(47)のように、三語は抽象名詞、また評価性がゼロである「こと」とも共起でき、「ひどい」しかマイナス評価を表さず、「すごい」「えらい」はプラスとマイナス評価とも可能であるが、(48)の省略表現では、「ひどい」しか用いられない。被修飾語「こと」が省略されると、各形容詞は元の意味しか残さない。しかし、「すごい」の表す意味が文脈に依存するため、(48a)は情報が不十分でプラスかマイナスか決められない。また、〈量・程度〉の「えらい」は述定用法がないため、非文になる。

<sup>6</sup>田ら(1998)もその点について述べている。田ら(1998:425)では、「すごい」と「ひどい」は程度の高さを表す場合、互いに入れ替えられる場合があるが、「すごい成績[できあがり・作品・食べ物・酒・本・音楽・方法]・すごい絵を描く」などのプラス評価は、「ひどい」に換えると、マイナス評価になる。」と指摘している。

## 5 「すばらしい」

「すばらしい」は評価形容詞であり、主にプラスイメージで使われると思われる。飛田・浅田(1991)は、「すばらしい」について、「非常にすぐれていて感嘆すべき様子を表す」と指摘しており、意味の近い「立派(な)」、「すてき(な)」、「見事(な)」などとも比べている<sup>7</sup>。また、「述語にかかる修飾語として用いられた場合、述語の程度を高めるはたらきをする」と述べ、以下のような例文を取り上げている。

(49) 今日はすばらしくよく晴れている。 (飛田(1991))

(50) うちの弟はすばらしくばかだ。 (飛田(1991))

しかし、(51)のように、「すばらしい」は連体形しか〈程度が甚だしい〉ことを表さない。

(51) a すごい／えらい／すばらしいスピード

b スピードがすごい／\*えらい／\*すばらしい。

(52) a すごい／えらい／\*すばらしい差がある。

b 差がすごい／\*えらい／\*すばらしい。

(53) a すごい／えらい／\*すばらしいあざ

b あざがすごい／\*えらい／\*すばらしい。

(54) a すごい／\*えらい／すばらしい快挙

b 快挙が?すごい／\*えらい／\*すばらしい。

すでに述べたように、〈量・程度〉を表す場合、「すごい」は装定

---

<sup>7</sup>飛田(1991:311)によると、優れている状態を客観的に表すとき、「りっぱ」などを用いる。「すばらしい」は話者の気持ちを表している、主観性のある評価形容詞であると示唆している。また、「みごと(な)」も意味が似ているが、「すばらしい」は物の性質としてすばらしさを暗示するのに対して、「みごと(な)」は結果としてのすばらしさを暗示すると指摘している。さらに、「すてき」も感嘆の気持ちを表すが、相対的に少なく、対象との間に心理的な距離があると述べている。

用法でも述定用法でも使われるが、「えらい」は装定用法でしか使われない。「すばらしい」も同様の特徴を持っている。しかし、(52)から(54)を見れば、〈量・程度〉の「すばらしい」が修飾できる名詞には「すごい」「えらい」より一層制限がある。評価の含まれない、ただ「差が大きい」を表す場合、「すごい」も「えらい」も用いられるが、「すばらしい」は用いられない。

したがって、「すばらしい」は「ひどい」と似ており、評価性が高いと言えよう。

## 6 「おそろしい」

### 6.1 「こわい」との意味の違い

(55) 霊眼で見ると、まるで雷雲を思わせるような、黒雲のごとき想念エネルギーが地上世界のいろんなところにポツカリと浮かび、この想念体が、さらに大きな混乱を地上に起こすための物理的な力にかわっていつているようです。このように、人間の心の作用とは、すばらしいもので、反面、こわい（／おそろしい）ものでもあります。

（大川隆法『太陽の法』）

(56) 「しかし、あなたは昨年、西ドイツを訪問した時、向うの記者たちに、日本の自動車メーカーは、ハローの挨拶もせず、のこのこ上陸して来て、アメリカ市場をひっかけ廻している、われわれビッグスリーにとって、フォルクスワーゲンより、日本の自動車の方がずっと危険で、こわい（／おそろしい）相手だと、云われたではないですか」

（山崎豊子『不毛地帯』）

(57) この「突然変異ウィルス」。不幸にも感染してしまった人にとっては恐ろしい／（こわい）存在だろう。

（加藤良平『遺伝子工学が日本的経営を変える！』）

(58) 「オイッ、待てッ」警官が恐ろしい（／こわい）声で、



どになりました。

(江戸川乱歩『三角間の恐怖』)

(55)～(58)の例から分かるように、意味から見れば、「おそろしい」と「こわい」は類義関係を持っている。吉田(2005)は、感情形容詞には、感情表示機能が強いものと、評価機能が強いものがあると指摘している。また、項構造から見れば、感情形容詞の「こわい」は必須二項形容詞であり、しかも評価性が強い形容詞である。その点において、「おそろしい」は「こわい」と共通している。

(59) 私は神の罰がおそろしい。

→私はおそろしい。神の罰はおそろしい。

(60) 私はお化けが怖い。→私は怖い。お化けは怖い。

(吉田(2005:8))

「おそろしい」、「こわい」はいずれも感情を引き起こした対象と引き起こされる主体の存在が必要である。両語とも「私」という経験者(Experiencer)と「お化け」「神の罰」という感情の対象(Theme)の二項を必須項として取る。

さらに、「ナル構文」のテストによって、「こわい」には〈主語名詞の属性が変化した〉と〈主語名詞に対する話者の感情が変化した〉という二つの解釈と、〈主語名詞に対する話者の感情が変化した〉という一通りの読みしかない場合がある。

(61) あの先生が恐くなった。

(吉田(2005:11))

(62) 手術が恐くなった。

(吉田(2005:11))

(61)には「以前はやさしかったあの先生が兇暴になった」「私はあの先生を以前より恐れるようになった」という二通りの読みがあるが、(62)には「手術を以前より恐れるようになった」という話者の感情変化しか表さない。それに対して、「おそろしい」はどちらでも

「主語名詞に対する話者の感情が変化した」という読みしかない。

(63) あの先生が恐ろしくなった。

(64) 手術が恐ろしくなった。

しかし、(65)～(67)のように、その両語は互いに入れ替えられない場合も少なくない。

(65) 草原で恐ろしい／?怖い毒蛇にあい、怖かった。(大辞泉)

(66) 「まさかこの時期日本の女が堂々と公安局へやってくるなど思いもしなかったのです。そんな怖いもの知らず／\*恐ろしいもの知らずの女など未だかつて来たことがありませんでしたから。」(良永勢伊子『忘れられた人びと』)

(67) ああ、雪が降って参りました。どうも雪の日には昔を思い出しましていけません。私の恐ろしい／\*怖い不幸が思い出されて、寂しくて寂しくてどうにも仕様がなないので御座います。

(大慈宗一郎/鮎川哲也『こんな探偵小説が読みたい』)

形容詞の連体修飾の性格について、森田(2008)では三種類に分類している。①は対象自体が持つ属性を捉えた表現であり、例えば「鋭い刃」、「丸いテーブル」などがある。②は対象と話者との二者関係における話者側の主観として説明的に述べるものであり、例えば「懐かしい故郷」、「大嫌いな料理」などがある。③は話者側の感じる状態と対象自体が具有する性質と重なる場合があるものであり、例えば「恐ろしい怪談」、「薔薇の痛い棘」などである。森田(2008: 210)では、③の感情や感覚が、「特定個人の場合だけのものではなく、万人共通の普遍性を帯びるとき、②が同時に①でもあるということになる。」と指摘している。したがって、(65)～(67)から見れば、(65)の「恐ろしい」はその毒蛇の属性を限定しているが、「怖い」は話者



が経験したことに対する「恐怖感」を表している場合が多い。それに対して、「おそろしい」はその対象の感情に限定せず、一般大衆もそう感じる場合によく使われると思われる。また、(67)の「おそろしい」は恐怖感を感じさせるのではなく、不幸の程度が甚だしい、驚くほどであるという意味を表している。したがって、ただ対象に対する感情を示す「こわい」は使えない。

以上から分かるように、「おそろしい」、「こわい」は〈恐怖を感じる〉という意味を表す感情形容詞であり、しかも両語とも評価性が強いが、異なるところもある。「おそろしい」には「こわい」が持っていない〈程度が甚だしい〉などの意味が含まれている。

では、何故「おそろしい」には〈恐怖を感じる〉だけではなく、さらに〈程度が甚だしい〉という意味も含まれているのか。

- (68) a あの先生はおそろしい。  
b あの先生はこわい。
- (69) a 「ギャー、\*おそろしい！」  
b 「ギャー、こわい！」
- (70) a おそろしい／こわいほどの人出だ。  
b おそろしい／\*こわい人出だ。

(68)の「おそろしい」と「こわい」は互いに入れ替えられるが、ニュアンスは異なる。(68b)の場合では、例えば、あの先生と話者との個人的関係で、話者が怖いと思っていることを表している。それに対して、(68a)の場合では、先生が怒ったら、どんな振る舞いをするか、どんなことが起こるか想像できないから、誰からも恐れられているということを表していると思われる。

また、お化けを見て、(69b)と言う人はいるが、(69a)と言う人はいないと思われる。それに、(70a)は両方とも言えるが、「こわい」が使われる場合は、自分に危険が及びそうな意味が含まれるが、「おそろしい」のほうは人がたくさんいることに驚くという意味が含ま

れている。したがって、「こわい」は対象に接して直接に発する即自的言葉であるが、「おそろしい」は対象に接して、少し時間が経って事態を反省的に捉えた時に使われる言葉だと言えよう。

つまり、「こわい」は話者が対象に接して直接に発する言葉であり、反応時間は「おそろしい」より短い。したがって、話者は直感的には「こわい」という語で反応するであろう。一方、「おそろしい」は考える余裕があって、直接の反応と言うより、むしろ評価性が強く、評価形容詞に近いと思われる。

さらに、(71)(72)から分かるように、「おそろしい」「こわい」との共通点は〈恐怖を感じる〉だけでなく、〈不思議で、説明がつかない〉という意味も表している。

(71) 慣れとはおそろしいもので、静かな所ではかえって眠れない。(大辞林)

(72) 一念というのはこわいもので、とうとうやりとげた。(大辞林)

しかし、両語の意味拡張のプロセスは異なると思われる。「おそろしい」も「こわい」も基本義の〈恐怖を感じる〉から、〈恐怖〉という感じにある未知感を引き出し、プロファイルされると、〈不思議で、説明がつかない〉という意味になる。しかし、「おそろしい」には「こわい」のない共感覚、社会性、それに事態を反省的に考える余裕があるため、さらに〈程度が甚だしい〉という意味へと拡張されていくのだと思われる。

## 6.2 「おそろしい」の統語的特徴

(73) こわい／\*おそろしいもの見たさ

(74) Aは怖がり／\*おそろしがりなので、ホラービデオを決して一人で見ようとはしませんでした。

(少年Aの父母『「少年A」この子を生んで…』)

- (75) 「怖がらないで／\*おそろしがらないでね。あなたももし永久に失われてしまったとしても、私は死ぬまでずっとあなたのことを覚えているから。私の心の中からはあなたは失われないのよ。そのことだけは忘れないでね」  
(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド 2』)

- (76) 横山は恐ろしそうに (／こわそうに) いった。「ぼくが殴ったときは頭ん中にあった脳は…？」  
(飯田譲治・梓河人『アナザヘヴン』)

- (77) 産婦はかっとなを睨んで、あてどもなく一所を睨みながら、苦しげというより、恐ろしげに／\*こわげに顔をゆがめた。  
(有島武郎『小さき者へ；生れ出ずる悩み』)

(73)の「怖いもの見たさ」「恐がり」また(66)の「怖いもの知らず」などの慣用語は「おそろしい」と入れ替えられない。(66)と(73)の「こわいもの」は感情主自身が恐怖を感じるものであるが、他人もそう感じるわけではない。(74)と(75)の「怖がり」、「怖がらない」は形容詞語幹の「こわい」＋動詞化接辞「～がる」から派生したものである。それに対して、「\*おそろしがり」という言い方はない。それは「おそろしい」より、「こわい」は個人的・直接的な感情を表すからである。一方、「おそろしい」は共感覚で捉えられ、社会性を持つものである。

また、両語は(76)(77)の形容詞接尾辞「-そう」と「-げ」と接続するかどうかによってもそれぞれの性格がわかる。「おそろしい」は「-そう」でも「-げ」でも接続できるが、「こわい」は「-そう」しか後接できない。湯(2012: 133)は、「-そう」という接尾辞を取って形容名詞化<sup>8</sup>すると、語幹が内的心理状態を表す感情形容詞でも、内的心理が外的様相として現れ、外部から内的心理の観察が可能に

<sup>8</sup> 湯(2012)の言う「形容名詞」とは、国文法でいう形容動詞のことである。

なる形容名詞に変化するのである」と述べている。つまり、(76)の「恐ろしそう(に)」「こわそう(に)」が使われるのは、話者(外部者)が「横山」の気持ち(内的心理)を観察しているためだと思われる。それに対して、「-げ」は内的感覚や心理状態が彷彿と感じられるような、外部からの観察というよりも、外部からの観測・推測・推量というような意味合いをもつと言えよう(湯(2012:133))。この点から見れば、「おそろしい」は話者は感情主の様子を見て、さらにその様子を推測して表現するが、自分自身はそのような感じが湧いてこない。しかし、「こわい」にはそのような傍観者的な視点がないので、「-げ」と後接できない。

また、「こわい」は述定用法、つまり「○○はこわい」という用法が多いが、「おそろしい」は装定用法、つまり「おそろしい○○」のほうが多い。それに、後者の被修飾名詞の種類も多様であると思われる。

- (78) こわい：もの、こと、話、気持ち、思い…  
おそろしい：もの、こと、話、気持ち、思い、勢い、過去、未来、不幸、人生、光景、人出…

この点においても、評価形容詞の「えらい」と同じく、述定では、「おそろしい」も程度が甚だしいことを表せない。日本語の形容詞では、評価・判断形容詞と感情・感覚形容詞は述定用法が発達している。したがって、感情評価と程度の意味を表現できる「おそろしい」は述定用法では、感情評価を表し、〈程度の甚だしさ〉に優先されると言えよう。

## 7 「いや(な)」

- (79) 私は試験がいやだ。→私はいやだ。試験はいやだ。

(吉田(2005:8))

「いや(な)」は感情形容詞であるが、評価形容詞にもなり得ると吉田(2005)は指摘している。感情評価形容詞の「いや(な)」も経験者(「私」)と感情の対象(「試験」)が二項が必要で、必須二項形容詞であると思われる。また、「いや(な)」は「感情対象がきわめて主観的・個人的に限定されたものである場合が多い」と思われる(吉田(2005:14))。すなわち、特定の個人的な感情を表し、社会性を持たないと言える。この点において、同じく感情評価形容詞の「おそろしい」とは異なり、前にも述べたように、後者は共感的で、一般大衆もそう感じる場合で使われる。

「いや(な)」は(80)～(82)のように、〈不快だ〉〈悪い〉というマイナス意味で使われており、話者個人の感情を表している。しかし、連用形になると、(83)(84)のように〈程度がはなはだしい〉という意味で使われることができる。

(80) どうしても、その撮り方じゃいやだ、この撮り方しかおれにはできないんだ、ということがあるやつだけが、ほんとの監督なんです。(大島渚『大島渚 1960』)

(81) 「私は料理がまったくの苦手よ。手にいろんな匂いがつくのがいやなのよ」(谷村志穂『ハウス』)

(82) しばらく部屋に籠城して、ほとぼりの冷めるのを待つのだ。そう思って、角を曲がり、アパートの見える場所に来た途端、いやな予感がした。

(青沼静也『チェーンレター』)

(83) 賑やかな心齋橋を渡り、アベックの見物人のいやに少ない大阪城を一周した。(竹内忠『夜よ、もう来るな!』)

(84) 「ところが今年の東京はいやに涼しいのよ。あたしはだから暑くなってからそちらに行くわ」

(北杜夫『マンボウ酔族館』)

(83)(84)の「いやに」は〈変だ〉〈おかしい〉という意味が含まれており、(83)の見物人の少なさと(84)東京の涼しさを修飾しているが、元の〈不快だ〉〈悪い〉という意味がほとんどないと思われる。それに、前述したこれらの語の統語的特徴から見れば、形容詞の「いや(な)」には述定用法でも装定用法でも使われることができるが、〈量・程度〉の意味は持たないと考えられる。つまり、形容詞とするときは語彙性が高いが、程度性はほとんどないと言えよう。「いやに」とほかの語の副詞連用形とはどのように異なるのかは後に述べるが、何故程度と関わらない「いや(な)」が副詞形になると、元のない〈量・程度〉の意味が出てくるのか。

(85) いやというほど叱られた。(=「ひどく」)

(86) 頭をいやというほど柱にぶつけた。(=「強く」)

「いや(な)」は純粹たる形容詞とする場合では程度に関わらないが、慣用句の「いやというほど」で使われると、程度を表す修飾語と入れ替えられる場合がある。(85)(86)の下線部はそれぞれ「ひどく」「強く」と置換でき、話者が受けた叱り方のひどさ、頭がぶつけた程度の強さを表している。つまり、慣用句の使い方から見れば、「いや(な)」は質的側面で人間の感情を表しているだけでなく、量的側面でも、他の語より薄く思われるが、程度の甚だしい様子を表現することができると考えられる。したがって、副詞連用形で程度を修飾するのも自然になるであろう。

## 8 「すさまじい」

飛田・浅田(1991)によると、「すさまじい」には①〈非常におそろしい様子を表す〉と②〈恐怖を感じるほど程度が甚だしい様子を表す〉という二つの特徴を持っている。確かに、意味から見れば、「すさまじい」も「おそろしい」も〈恐怖を感じる〉ことを表すことができるが、評価形容詞である「すさまじい」が話者自身の物事への



評価であるのに対して、「おそろしい」はすでに述べたように、社会性を持つ共感覚で捉えられるものである。

(87) 悲しみと怒りにゆがんだ顔はすさまじい／?おそろしい  
形相で、僕はこわくなった。

(ブレイディ・ユドール『エドガー・ミント、タイプを打つ。』)

また、「すさまじい」も装定用法で〈程度が甚だしい〉ことを表すことができる。それだけでなく、「すさまじい」は「すごい」のように、述定でも〈程度の甚だしい〉ということが表現できる。しかし、「すさまじい」は元の〈恐怖を感じる〉という意味を引きずり、共起する修飾対象はゼロ評価、あるいはマイナスイメージが含まれるものが多いと思われる。

(88) a おそろしい金額／力／スピード／勢い…

b すさまじい金額／力／スピード／勢い…

(89) パスや動きに全くついてく事が出来ずあつという間に3失点。すぐに思った事は世界との差はすさまじい。

(Yahoo!ブログ)

(90) 中国製造業は躍進しており、その勢いは確かに凄まじい  
(王曙光『中国製品なしで生活できますか』)

(91) Tシャツの袖をめくると、クッキリと境界が分かる。たった一日だけだが、夏の太陽の力はすさまじい。

(嘉美原一也『巣立ちの日』)

(92) \*すさまじい／すごい美男子／賞賛／豪邸だ。(作例)

以上の特徴から見ると、「すさまじい」は程度形容詞である「すごい」と近く、〈程度が甚だしいこと〉を表しているが、〈量・程度〉がプロファイルされる場合でも、元の〈恐怖感を感じる〉という意味の影響を受け、プラスイメージの修飾対象と共起できないと言え

よう。

## 9 「たいへん(な)」と「非常(な)」

### 9.1 「たいへん(な)」

- (93) 赤ちゃんの頃から理由もないのにギャアギャアと異常に泣く子どもで、母はどうやって私を育てたのか記憶がない、と言うくらいに子育てが大変だったそうだ。寂しがりやの甘えん坊で少しでもそばから離れるとオギャアと泣く。  
(佐々田純子『Drop out』)
- (94) シルバーナ・ルアディは半狂乱になっていた。「大変! 助けてちょうだい！」絶叫まくっている。  
(シドニイ・シェルダン『明日があるなら』)
- (95) 中国は、十年間で一万キロの道路を開通させるという。大変なスピードだ。(大下英治『小泉純一郎vs. 抵抗勢力』)
- (96) これは、今世紀最後の大型哺乳類の発見だ。学術的に大変な価値がある。(草原ゆうみ『七つの海のティコ』)
- (97) いまや「世界の工場」と化した中国が崩れれば、日米をはじめ世界経済に大変な打撃を与えることになる。  
(浅井隆『いよいよインフレがやってくる!』)
- (98) このランチだって、三日に一度食べていれば、大変な金額になる。(赤川次郎『本日は悲劇なり』)
- (99) 人間にとって、子どもから大人になるというのは大変なことである。子どもがそのまま大きくなって大人になるのではなく、相当な質的変化があつて大人になるのだ。  
(河合隼雄『「出会い」の不思議』)

(93)の「たいへん(な)」は〈物事が人間にとって精神的、あるいは肉体的につらい、苦しい〉という意味で使われ、「たいへん(な)」の基本義と思われる。すなわち、「あの人、大変だ」という場合、あの人属性を表しているのではなく、あの人状況を表している。



ある物事がマイナス状態になり、あの人に悪い影響を与えていると思われる。また、「たいへん(な)」は(94)のように話者の驚きを表すことができると思われ。さらに、(95)～(98)の「たいへん(な)」はそれぞれ〈速い〉、〈重大な〉、〈深刻な〉、〈高い〉などと入れ替えられ、いずれも物事の度合いが普通より高いことを示している。それは、「たいへん(な)」の基本義である〈つらい、苦しい〉から拡張しており、〈普通より高い〉の部分を中心として、元の実質的な意味が薄れ、〈量・程度が高い〉へと拡張していくからである。

一方、統語的な面からみると、「たいへん(な)」は装定用法で後接名詞を修飾する場合、評価性のゼロの「スピード」や、プラス評価の「価値」、マイナス評価の「打撃」などの名詞も共起できる。したがって、(99)のように形式名詞の「こと」と共起する場合は文脈によって、プラスかマイナスかの評価を表すと思われる。〈量・程度〉を表す「たいへん」も「えらい」、「ひどい」などと同じく、装定用法しか使われていない。

さらに、名詞化の場合、「大変さ」は基本義の〈つらい、苦しい〉しか持っておらず、拡張義の〈量・程度〉を表さない。

(100) 「よかったわあ。お父様のこともね、私、いろいろ考えますから、ほら、頼まれたことには、NOがないのがウチのモットーでしょう」と彼女が言った。介護の大変さも介護をめぐっての家族の葛藤もなにもかも承知の人である。  
(久田恵『母のいる場所』)

(101) 土と生きる、農業の実際の大変さは、都会の消費者でしかない私にはとうてい計り知れないのですが…。  
(奥津典子『Organic base マクロビオティックと暮らす』)

(100)(101)の「大変さ」は両方とも〈つらい、苦しい〉という基本義を表している。先に述べた研究対象、例えば「すごい」「ひどい」も「-さ」をとって名詞化すると、プロトタイプの意味でしか使われ

ず、拡張義の〈量・程度〉を表さないとされる。

## 9.2 「非常(な)」<sup>9</sup>

「非常(な)」は〈普段と異なる〉という意味で、よく「非常○○」という形で通常でない物事を表す。例えば「非常段階」、「非常ベル」、「非常事態」などである。また、形容詞連体形で〈通常でない〉という基本義を表しており、さらに〈一般の基準を超えて、並外れる〉という質的側面から量的側面へと拡張し、〈量・程度の高さ〉を表している。また、(102)～(104)のように、「非常(な)」の拡張義〈程度が甚だしい〉という意味は公式の発言で使われる場合が多いと言える。

- (102) 私は、前提として、私の信念として、日本経済に対する 非常な 懸念はあるけれども、自分としてはマイナス成長にしないよう懸命の努力を続けていきたいと。  
(国会会議録)
- (103) 今回も同じ上げ幅ということで負担の増加をお願いすることにすれば、まあ市場に 非常な 悪影響を及ぼすことなしに負担していただけるのではないかという考え方をとったわけでございます。(国会会議録)
- (104) 第三は貧富の差。単なる貧富の差というより、非常な 競争社会であることですね。今、日本なんかはそうなりつつある。(NHK放送研究と調査)

村木(2012)によると、基本的には、日本語の形容詞は3つの機能を持っている：①名詞を修飾限定する規定用法(=装定用法)、②述語としての用法(=述定用法)、③動詞述語を修飾限定する修飾用法

---

<sup>9</sup>名詞(N)を修飾する場合、「非常」には「非常のN」、「非常なN」という二つの可能性がある。ほかにも例えば、「自由の女神」、「自由な女神」などがあるが、本稿は「非常なN」のみを研究対象にする。

(=副詞形で修飾すること)。面白いことに、他の研究対象と比べると、「非常(な)」が基本義として使われる場合でも述定用法で表現することはほとんどない。すなわち、「非常(な)」は②の機能を持っておらず、①の装定用法と③の副詞形しか持たない。したがって、統語的な面からみれば、「ひどい」、「えらい」などは、述定用法から装定用法へという順で程度性が強くなるが、「非常(な)」はこれらの語と異なる転化のプロセス、むしろプロセスを持たないと見られる。それに、「非常(な)」には「-さ」をとって名詞化する「\*非常さ」はない。

さらに、後接名詞を調べると、「非常な勢い」、「非常な勇氣」、「非常な困難」など程度性がある名詞と共起するケースが多いが、プラス評価かマイナス評価の単語、さらに評価性のゼロのものもあることから見れば、「非常(な)」は被修飾名詞の〈量・程度の高さ〉を焦点とする評価性のない形容詞であると思われる。

### 9.3 「たいへん(な)」と「非常(な)」の相違点

「たいへん(な)」と「非常(な)」とも〈アブノーマル〉や〈量・程度が高い〉という意味を表しているが、意味拡張のプロセスが異なると思われる。また、〈量・程度〉を表す場合、後接した単語から見れば、二語の表す意味の特徴に相違点があることが明らかである。

- (105) 日本の学校では、先輩後輩の関係を非常に重要視する。母校が甲子園に出るともなれば、学校の組織は最大限に活用され、それこそ大変な／(\*非常な)騒ぎになる。

(佐山和夫『松井秀喜の「大リーグ革命」』)

- (106) 日田郡大山町は、故矢幡治美町長が長年にわたって独自の地域振興に尽くされ、婦人会としても積極的に意見を述べ、協力してきた。しかし、大変な／(\*非常な)改革が非常な／(大変な)勢いで進められたという印象もある。

(富士谷あつ子『日本農業の女性学』)

二語とも(106)の「勢い」を修飾できるが、(105)の「騒ぎ」と(106)の「改革」は事件性、ストーリー性がある名詞であり、「たいへん(な)」と共起できるが、「非常(な)」で修飾することができない。また、「非常(な)」と共起できるのは程度性がある名詞であるため、程度性のない「\*非常な改革」が不自然なのは当然であろう。よって、「たいへん(な)」が修飾できる名詞の種類は程度性が高い「非常(な)」より多く、前者は後接名詞の過程とその一連性を焦点として修飾するが、後者は〈程度が強い〉ことを焦点としていると言えよう。

また、拡張義として使われる「たいへん(な)」と「非常(な)」は形容詞形だけでなく、副詞形でも改まった挨拶言葉と共起する場合が多い。

- (107) 「浅井でございます。このたびは本当に大変なご迷惑をおかけしまして。主人は仕事の都合で参れませんです」 (宮部みゆき『人質カノン』)
- (108) 「財布がありました。本箱の後ろに落ちていたのです。皆さんに大変御迷惑をかけて申し訳ありません。何卒私の不注意と粗忽を許して下さい」  
(大泉黒石『日本怪奇小説傑作集』)
- (109) 「…これについては大蔵省、運輸省を初めとしてそれぞれの皆さん方の非常な御努力があったものだと思いますし、その意味では私からも感謝を申し上げたい、こういうふうに思っております。」 (国会会議録)
- (110) 丸山参考人上福岡市におきましては当公団は何千戸という住宅をつくらせていただいているわけでございますし、非常にお世話になっているわけでございますから、折衝に当たりましては我々といたしまして、もちろん誠心誠意お話し合いを進めてまいりたいと思っております。 (国会会議録)

それに、「たいへん(な)」は程度副詞で修飾することができるが、「非常(な)」はやや不自然である。

- (111) 幸いなことに、家を担保にすれば、ある程度何とかできそうであったが、金利も安くはなく返すにはかなり大変な／(?)非常な数字であった。

(有村英明『届かなかった贈り物』)

- (112) 研究実践の実務を引き継ぐことはかなり大変な／非常なことであるから、引き継ぎのタイミングが難しい。

(椎名文彦『日々しなやか』)

湯(2012:266)が指摘しているように、形容動詞は、形容詞的な機能を備えているため、「とても、たいへん」などの程度副詞を取ることができるが、「非常(な)」は程度副詞と共起できないと思われる。それに、前述したように、「非常(な)」も接尾辞の「-さ」をとって名詞化することができない。以上の特徴から見れば、「非常(な)」は一般の形容動詞ではなく、「すごい」「えらい」などと比べると、程度性がより高い形容動詞であると言えよう。

## 10 「ばか(な)」

- (113) 「俺は鳥目じゃないよ。馬鹿な野郎が、タクシーの前に自転車で、急に飛び出してきやがった。…」

(藤田宜永『モダン東京物語』)

- (114) 部屋を広げるために、出入りの素人大工が柱を切っていたという馬鹿な理由である。(東郷隆『代表作時代小説』)

- (115) 「つまり、炬燵の火が強過ぎると蒲団が焦げる様に、湯婆が熱すぎて火事になると云う事はありませんかね」「そんな馬鹿な事があるものか君」と湯婆で火傷した甲君が、

横から口を出した。

(内田百閒『大貧帳』)

(116) ドアの鍵がばかになっていて、よく閉まらない。

(飛田・浅田(1991))

上述した例のように、(113)は〈人の知的な能力は低下、あるいは足りない〉というマイナス意味で使われることが多い。この基本義の修飾対象が人の知力、判断力などから人の能力と拡張しており、さらに(116)のように物や人の機能・能力を表している。(113)～(115)はそれぞれ〈愚かな〉、〈浅はか〉、〈ナンセンス〉と入れ替えられるが、誇張するニュアンスも含まれていると思われる。このように、「ばか(な)」は元の〈一般人と違う特性〉というより具体的な意味から抽象化すると、〈基準から並外れている〉という概念になるが、前述した研究対象などのように、形容詞で量的側面、つまり〈量・程度〉の意味を表すほどに転化してはいない。

統語的な面からみれば、「ばか(な)」には述定用法ないと思われる。<sup>10</sup>また、(113)～(115)のような装定用法があっても、「\*ばかな勢い」「\*ばかな騒ぎ」などのように程度差のある名詞と共起できない。したがって、形容詞の「ばか(な)」は質的側面しか修飾できないが、量的側面と関わっていないと思われる。

以上の分析から見れば、「ばか(な)」は形容詞とするときは基本義が強いが、程度性がほとんど持っていないと言える。つまり、修飾できるものは量的側面まで進まず、質的側面に止まっている。

## 11 まとめ

本章は形容詞とする研究対象を意味的・統語的に考察した。その結果をまとめると、次のようになる。

- ① 意味的から見れば、本稿の研究対象は元の基本義から拡張義になると同時に、質的側面から量的側面を修飾するようにも

<sup>10</sup>述定用法の「AはBだ」という形で言えば、「あの人はばかだ」のような用法があるが、この場合では名詞だと認められる。



なり、〈程度がはなはだしい〉ことを表している。しかし、「いや(な)」と「ばか(な)」はその例外であり、前者は慣用句の用法から見れば、他の研究対象より薄い、〈量・程度〉の意味を表している。一方、〈ばか(な)〉は質的側面に止まっている。

- ② 統語的から見れば、各語が基本義とする場合、装定用法とも述定用法とも用いられるが、拡張義の〈量・程度〉を表す場合、装定用法しか使われない。両用法を持つ「すごい」「すさまじい」はその例外である。
- ③ 拡張義の〈量・程度〉を表す場合、評価性が含まれているかどうかは装定用法での後接名詞と関わっているが、元の形容詞の基本義から引き摺り、影響が残される場合もあると考えられる。

以上述べた形容詞が〈量・程度〉を表す場合の特徴を以下の表のように整理する。<sup>11</sup>

	基本義	述定用法	装定用法	プラス評価	マイナス評価
すごい	－	＋	＋	＋	＋
えらい	－	－	＋	－	－
ひどい	＋	－	＋	－	＋
すばらしい	＋	－	＋	＋	－
おそろしい	＋	－	＋	－	＋
すさまじい	＋	＋	＋	－	＋
たいへん (な)	－	－	＋	－	＋
非常(な)	－	－	＋	＋	＋

<sup>11</sup> 「いや(な)」と「ばか(な)」には〈量・程度〉の用法を持たないため、表に載せない。





### 第3章 形容詞の程度副詞的用法と動詞句

#### 1 はじめに

本章は形容詞が副詞形で程度を表す場合、どのような動詞と共起するかについて明らかにする。また、何故このタイプの動詞と共起するのかを分析する。

#### 2 形容詞連用形とすべき場合

考察に入る前に、ここで形容詞連用形と程度副詞の相違点について説明しておく。本稿の研究対象とする「すごく、ひどく」などは元々形容詞であるため、連用形になると、程度を表さず、形容詞の意味で使われる場合もある。

- (1) 最近お会いした人の中で感じた事は、すごく見えない人の方が実際はすごい人が多いのではないかという事です。  
(<http://blog.folksworks.com/entry/2008/000973.html>)
- (2) すごく見えるようになった。 (作例)

(1)(2)とも「すごく見える」であるが、意味を異なる。(1)は〈すごいと見えない〉という意味で、「すごく」は〈立派に〉と置き換えられ、アクセントは頭高型であるが、(2)の「すごく」は〈はっきり〉と置き換えられ、アクセントは中高型である。すなわち、(1)の「すごく」は人の特質、能力などの質的側面を修飾している一方、(2)の「すごく」は見える程度の高さについて、〈量・程度的〉側面を修飾している。

「すごく」だけでなく、他の語も形容詞連用形と判断される場合がある。

- (3) 社長は太郎のことをひどく話している。 (作例)
- (4) 『私の恐怖体験を恐ろしく話して！』

(テレビ番組のタイトル)

- (5) 穏やかな海が恐ろしく見えることがある。

(英辞郎 on the WEB)

- (6) 林の角に歩兵が散兵線を布いていると思うと、バリバリと小銃の音が凄まじく聞こえる。 (田山花袋『田舎教師』)

(3)～(6)はそれぞれ「ひどいように話している」「恐ろしいように話している」「恐ろしいように見える」「凄まじいように聞こえる」という意味である。また、(7)～(11)の下線部も形容詞連用形と視されている。

- (7) 交通事故で、怪我はひどく見えないのに、後遺症が残る場合が多々あるようです。(→ひどいと見えない)

(<http://www.kenshoukan.com/sequelae/%E5%BE%8C%E9%81%BA%E7%97%87%E3%81%8C%E6%AE%8B%E3%82%8B%E7%90%86%E7%94%B1/>)

- (8) 上部だけは教師のおれよりよっぽどえらく見える。実は落ち付いているだけなお悪るい。おれには到底これほどの度胸はない。(→えらいと見える) (夏目漱石『坊ちゃん』)

- (9) 自分以外の全ての人が素晴らしく見えることないですか？もしくは我が子以外の子供のがきちんとしてるなどか思う事ない？ (→素晴らしいと見える) (Yahoo!知恵袋)

- (10) おまえは一見、非常に見えるが実はまるでそんなことはなく、その心底はケツの青いガキと一緒に。

(→非常だと見える)

(<http://www.geocities.jp/rihaku.jp/proverb/proverbofakagi.htm>)

- (11) 毎日のことですから、ときにはお料理がいやに感じることであってあるでしょう。もしもお料理がストレスになるようであれば、器具や食器を変えてみては？

(→いやだと感じる) (<http://mikestankewich.com/>)

- (12) 「そうなんです。そんなことを、さも人生の一大事のよう  
に考えているぼく自身も 馬鹿に見えました」「ふん。  
馬鹿に見えたか」「そうですよ」少年は言葉を選ぶでも  
なく言った。(→馬鹿だと見える)  
(風間一輝『男たちは北へ』)
- (13) 最近のファンのマナーは ひどく 思います。  
(→ひどいと思う)  
(Yahoo!知恵袋)
- (14) 本当は大好きなのに、そのひとのことをとても ひどく  
考えてしまうことがあります。(→ひどいと考える)  
(<http://okwave.jp/qa/q1124652.html>)
- (15) 久しぶりに行きましたが、やはり景観は 素晴らしく 思  
います。(→素晴らしいと思う)  
(<http://reserve.golfdigest.co.jp/comment/958501>)
- (16) 彼が冷い壁をじっと見つめたぎり、人と口をきくことも  
二階から降りることさえも厭わしく思うほど動けなくな  
ってしまった時は、「死」がそろそろ自分の身体にまで上  
りかけて来たかと 恐ろしく 考えたことを思出した。  
(→恐ろしいと考える) (島崎藤村『新生』)
- (17) 勉強を 大変に 思う時もあると思います。しかしながら、  
補習校で勉強したことは将来必ず役に立つ時がきます。  
(→大変だと思う)  
([http://www.houston.us.emb-japan.go.jp/jp/ryojikan/2014/0405\\_Nyu.html](http://www.houston.us.emb-japan.go.jp/jp/ryojikan/2014/0405_Nyu.html))

(7)～(17)の下線部は知覚主体が見た、聞いた、あるいは感じた内  
容を修飾する。(7)は怪我が深刻だと見えない、(8)は立派そうであ  
る、(9)は優れている、(10)は一般人と違う、(11)は嫌悪を感じる、  
(12)は人の知的な能力の低下を表すなどのように、これらの語はい  
ずれも「ひどいに見える」「えらいに見える」「いやだと感じる」「大

変だと思う」などのように「形容詞＋と＋思考動詞／知覚動詞」と解釈され、形容詞の基本義を表している。

一方、(18)～(22)のように、〈量・程度〉を表す場合もある。

- (18) 引っ越してきた頃は飛行機の音など全くしなかったのに最近は一時間に何回か飛行機の飛んでいる音がひどく聞こえてくるようになった。

(<http://bluecafenet.cocolog-nifty.com/blog/0904.html>)

- (19) ブラウナーのパンテラさんを立てて、マイクでアコギを録ってみたんだけど、かなり解像度が高い（但し防音してなかったらノイズや騒音もえらく聞こえる…）

(<http://warpandleap.seesaa.net/article/346416746.html>)

- (20) 最近インターネットの影響力を凄まじく感じる。（作例）

- (21) 家の回りでカエルの鳴き声が大変聞こえるようになりました。 (<http://69.175.29.10/9g5f8i>)

- (22) 「中国の台頭が顕著になる中で日米同盟体制に不安を感じるか」との問いに対し、34%が非常に感じる、50%が若干感じるとの結果が出ています。

(<http://lullymiura.hatenadiary.jp/entry/2014/02/02/224754>)

(18)～(22)の下線部はいずれも音や影響力、不安など程度性がある名詞の程度を修飾するため、知覚したものの〈量・程度〉を表している。しかし、「おそろしく」「すばらしく」「ばかに」「いやに」はこのような使い方がなく、下線部と置き換えられない。それについては後に考察する。

以上の分析から見れば、本稿の研究対象は副詞形で、発話動詞・思考動詞・知覚動詞と共起する場合、「～と」あるいは「～ように」と解釈され、程度を表さず、形容詞連用形とすべき場合がある。

### 3 共起する動詞のタイプ

考察に入る前に、程度副詞の定義について少し述べる。前述したように、通常、程度副詞は基本的に属性や静的な状態に関わるもので、その属性や状態の帯びる程度性を限定するものであるというのは従来の研究の指摘である(工藤(1983)、仁田(2002)など)。工藤(1983)では、程度副詞は動詞の表す運動性には関わらないと述べており、「「とてもゆっくり歩いている」のような動詞文に用いられた場合も、「ゆっくり」という状態にのみ関係し、「歩いている」という運動には関係しない」と指摘している。つまり、程度副詞と共起する動詞は、運動性と関わらない静的な変化動詞、内的情態動詞、思考動詞などが多いと思われる。しかし、これらの語はすべて通説のように一致するであろうか。

#### 3.1 進展性に限界を持たない動詞

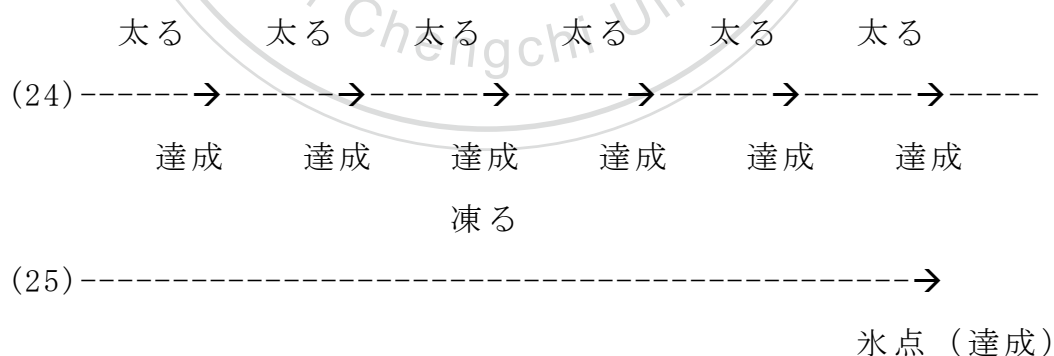
アスペクトの対立を持つ動詞について、金田一(1976)は語彙的アスペクトによって、「継続動詞」「瞬間動詞」などと分類している。工藤(1995)は大きく「外的運動動詞」「内的状態動詞」「静態動詞」の3分類をしている。また、「外的運動動詞」を〈動作〉か〈変化〉かという観点と、〈主体〉か〈客体〉かという観点を組み合わせてさらに次のように分けている。

- ①主体動作・客体変化動詞—開ける、折る、消す、入れる、並べる…
- ②主体変化動詞—行く、来る、消える、入る、出る、太る、就職する…
- ③主体動作動詞—動かす、打つ、食べる、歩く、走る、泣く、揺れる…

(工藤(1995 : 71-72))

いわゆる程度副詞は状態性の語と結びつくが、質や状態の変化を表す主体動詞とも共起可能であるため、まず主体変化動詞との共起から分析する。

主体変化動詞について、工藤(1995)は前に述べたように、「行く」「来る」「太る」などの動詞が属するが、基本的に自動詞であって、〈結果継続〉を表すと指摘している。また、森山(1988)はその変化の中には進展性的・漸次的に進んでゆくものがあると主張しており、「過程を持つ動きであると同時に、その過程において変化が漸次的に進む」ことを「進展性」と呼んでいる。さらに、佐野(1998)は変化が進展的に進む動詞句を「進展性に限界を持たない動詞句」と「進展性に限界を持つ動詞句」に分けている。例えば、「太る」などの進展性に限界を持たない主体変化動詞の「変化達成が漸次的累加され、そのたびに程度の異なる結果状態が成立する」(佐野(1998:9))ということは無限に起こりうるため、ほんのわずかでも一定の程度の変化が達成されれば「太った」と言える。一方、「凍る」などの進展性に限界を持つ動詞は「変化の達成点に至るまでの過程が漸次的に進む」だけで、氷点にならないと「凍った」という変化が達成されたとはいえない。



佐野(1998)は進展性を持つ主体変化動詞は「進展性に限界を持たない動詞」と「進展性に限界を持つ動詞」のいずれかに分類できると主張し、さらに以下のテストを取り上げている。



- (26) a いくらでも{(領土が)広がる／太る／(背が)伸びる}。  
 b 以前より{(領土が)広がった／太った／(背が)伸びた}。  
 (27) a \*いくらでも{(日が)暮れる／腐る／(風邪が)治る}。  
 b??さっきより{(日が)暮れた／腐った／(風邪が)治った}。

(26)の「(領土が)広がる／太る／(背が)伸びる」などのように、「いくらでも」と「さっきより」で修飾されることができるのは進展性に限界を持たない動詞句であるが、(27)の「(日が)暮れる／腐る／(風邪が)治る」などのように修飾されることができないのは進展性に限界を持つ動詞句である。ただし、注意すべきなのは、「進展性に限界を持つ動詞」にせよ「進展性に限界を持たない動詞」にせよ、どちらも一般に言われる限界動詞(telic verb)に属している。

主体変化動詞	主体動作・客体変化 動詞	主体動作動詞
倒れる、死ぬ、…	倒す、殺す、…	歩く、撫でる、…
変化動詞	動作動詞	
限界動詞		非限界動詞

(金水(2000:31))

金水(2000)の表から分かるように、主体変化動詞は限界動詞であり、進展性に限界を持つかどうかはその下位分類の一つの基準として、「限界動詞(telic verb)」「非限界動詞(atelic verb)」とは性質的に異なる。また、「進展性に限界を持つ動詞」と「進展性に限界を持たない動詞」との区別は、前者は変化が漸次的に進んで、達成点の一つしか想定できないが、後者は変化達成された後、さらに変化が進展することができ、複数の達成点が想定できる。

では、形容詞が連用形で程度を表す場合にはどのような動詞と共起できるのだろうか。

- (28) この本は手垢ですごく／えらく／ひどく／?すばらしく汚れている。 (作例)
- (29) 名前を教えられた子供たちの成績が(すごく／えらく／\*ひどく／)すばらしく伸びた。  
(加藤諦三『アメリカインディアンの教え』)
- (30) 先にも言ったように彼はおそろしく痩せていた。しかし若い頃は非常に美男だったことは今でもわかるし、彼自身は昔と変わらぬつもりでいた。  
(スタンダール『パルムの僧院 (下)』)
- (31) リンパ腺が非常に腫れていると医者に言われました。  
(Yahoo!知恵袋)
- (32) 「…あれ、あぶないよ。そこへお坐りなさい。ばかに酔ってるね」 (興津要『古典落語(続々々)』)
- (33) (\*すごく／\*ひどく／\*えらく／\*すばらしく／\*非常に／\*ばかに)凍った風が吹き抜けているはずなのに、中に入ると、意外に寒くない。 (城山三郎『勇者は語らず』)
- (34) 高慢なキャリアガールで、(\*すごく／\*ひどく／\*えらく／\*すばらしく／\*非常に／\*ばかに)腐ったような香水のおいをまきちらす最低の女だった。  
(岩井俊二『スワロウテイル』)

以上の例文が示すように、これらの語は(28)～(32)の「汚れる」「伸びる」「痩せる」「腫れる」「酔う」などの「進展性に限界を持たない動詞」と関わるが、(33)(34)の「凍る」「腐る」などの「進展性に限界を持つ動詞」と共起できない。つまり、語彙的な原因を除外すれば<sup>12</sup>、本稿の研究対象と共起する変化動詞は進展性に限界を持

<sup>12</sup>変化に限界のない動詞と共起できるといわれるが、以下の例文のように、「化粧が崩れる」の変化には限界があるが、「すごく」「ひどく」は「化粧が崩れる」と共起することができる。

(1) ずっと化粧しているのが嫌だし。やっぱり乾燥がひどいので、化粧がすごく(／ひどく／えらく)崩れている人もいます。

たないものである。

また、進展性に限界を持たない動詞において、自動詞の主体変化動詞が多いが、他動詞の客体変化動詞と共起する場合もある。(35)～(37)はその例である。

- (35) 白砂糖は、精製されて栄養が全部そぎ落とされてしまった、ただカロリーがあるだけのお砂糖でカラダをすごく冷やしてしまいます。

(<http://ameblo.jp/yururunatural/entry-11796076433.html>)

- (36) 本をなくしたり、ひどく汚してしまった場合、弁償をしていただくことになります。

(<http://www.sagamihara-kng.ed.jp/kouminkan/oonoda-i-k/html/library.html>)

- (37) 女は前髪をえらく伸ばしており、それらが全て目を通り越して鼻の当たりまで垂れ下がっている。

(<http://ncode.syosetu.com/n8147bq/39/>)

「進展性に限界を持たない」と「進展性に限界を持つ」動詞は以下のようなものが挙げられる。

進展性に限界を持たない動詞：

主体変化動詞：広まる、冷える、上がる、温まる、老ける、高まる、  
太る、痩せる、伸びる、縮む、腫れる、膨れる、増える、減る、酔う、汚れる、狭まる、変わる、…

客体変化動詞：冷やす、伸ばす、汚す、増やす、温める、高める、

---

(<http://www.jineko.net/forum/%E3%81%99%E3%81%B9%E3%81%A6%E3%81%AE%E5%BA%83%E5%A0%B4/72622>)

「すごく」「えらく」は、化粧が崩れた程度、すなわち量的側面を修飾するが、「ひどく」は崩れた様子、つまり化粧が崩れて顔がひどくなったことという質的側面を修飾する。この点からも「ひどく」はかなり元の形容詞の語彙的意味に影響されるものと思われる。

縮める、弱める、広げる…

進展性に限界を持つ動詞：

暮れる、腐る、凍る、冷める、沸く、溶ける、治る、枯れる、(夜が)明ける、(魚が)焼ける、…

### 3.2 内的情態動詞

- (38) ぼくはこの遺書にすごく感動したのです。  
(山崎哲・芹沢俊介『<恋愛>事件』)
- (39) 「それはつまり、告白ってことなのかな」また沢渡がうなづく。「そうだ。後で聞いたが、孝之もすごく悩んでいたらしい。」  
(五十嵐貴久『1985年の奇跡』)
- (40) 彼女の思いやりある言葉にひどく感動した。  
(Yahoo!知恵袋)
- (41) しばらくして二度目の電話が日中にあった時、自分が国枝という正体不明の男になっていたことを知らされて、栗田はひどく喜んだ。  
(黒井千次『夢時計』)
- (42) すると、その区長さんの長男で医科大学に行っている駒吉というのが、ちょうどその時に帰省していて、この話をきくと恐ろしく同情してしまった。  
(夢野久作『あやかしの鼓』)
- (43) それでも、直隆もキヌ江も幸子の人柄を気に入り、結婚そのものに対しては非常に喜んでいた。「いいお嫁さんだと思いました。わたしらも、嬉しかったですよ、本当に」  
(宮部みゆき『理由』)
- (44) 「女房にはなりません。たよりにならん。遊ぶだけ。遊ぶだけでも危っかしい。強盗やないと？」そう云いくすくす笑って、その言葉が馬鹿に気に入ったのか、もう

一度、「ほんとに、強盗やないと？」

(壇一雄『リツ子その愛・その死』)

(38)～(44)の示すように、これらの語は感情を表す動詞と共起できる。「感動する、悩む、喜ぶ、尊敬する」などはいずれも心理動詞と呼ばれるものである。このような心理動詞について、仁田(2002)は純粹程度の副詞と共起する動詞は非限界変化動詞だけではなく、「恨む、驚く、悩む、喜ぶ、感動する」などのようなある種の心的状態・感情のありようを作り出す心の動き・作用を表すものと、「軽蔑する、尊敬する、頑張る、苦勞する」などのような心的・情意的な評価や態度のあり方を含んだ動き・働きかけを表すものがあると指摘し、前者を〈心的活動動詞〉、後者は〈態度の現れに関わる動きを表す動詞〉と呼んでいる。しかし、仁田(2002)は程度副詞が知覚動詞、思考動詞とも共起できることを述べていない。

(45) 最近、旦那とのこれからをすごく考えます。浮気しているわけでもないんですが、考え方、性格が違いすぎてこのまま一緒にいていいのか悩んでしまいます。

(<http://tell-me.jp/q/172116>)

(46) 安藤さんは強いし、素質がいいというのはすごく感じる。  
(読売新聞東京本社『読売新聞』)

(47) ネズミ騒動以来、ときおり食べ物が途中でつかえたり、ひどく痛んで眠れなかつたりすることがあった。

(桑原一世『最後の王様』)

また、2で述べたように、これらの語が知覚動詞、思考動詞と共起する場合、形容詞連用形と判断されることがあるが、(45)～(47)から分かるように、程度を表す副詞とすべき場合もある。

次は2で分析した思考動詞との共起を補充する。

(48) (= (45)) 最近、旦那とのこれからをすごく考えます。浮気しているわけでもないんですが、考え方、性格が違いすぎてこのまま一緒にいていいのか悩んでしまいます。

(49) 朝岡さんによると、平塚選手はこの間ロシアに塾長と行ってケリモフ・シャンハルと試合をして負けて以来、すごく考えこんでるんだと。

([http://bmc.versus.jp/modules/tinyd0/rewrite/index.php?com\\_mode=nest&com\\_order=0&id=14](http://bmc.versus.jp/modules/tinyd0/rewrite/index.php?com_mode=nest&com_order=0&id=14))

(50) 「……北島さんは落合さんの家へ行くって家を出たそうよ。何かひどく考えこんでいたようだって。夕飯もあんまり食べないんで、家の人たちはからだでも悪いんじゃないかって心配したんだけど何も言わなかったそうよ」 (光瀬龍『明日への追跡』)

(51) かれの語るところによると、陽子はけさ天坊さんが浴槽で溺死しており、あまつさえタマ子のいどころがわからないと聞いて以来、ひどく考えこんでいたそうである。 (横溝正史『迷路荘の惨劇』)

(52) 「どうしたんだ？何かえらく考えこんでるな？」

(<http://freett.com/gotoh913/gift1/academy.html>)

「考える」「考え込む」とも思考動詞であるが、「すごく考える／考え込んでいる」とも言えるのに対して、「ひどく」「えらく」「すばらしく」などは「考え込んでいる」としか共起できない。姫野(1978)は「～こむ」の複合動詞について、「内部移動」と「程度進行」と二種類の意味があり、「考えこむ」は後者の「程度進行」に属しており、本稿の対象とする形容詞は連用形で修飾することができ、(48)のように「私」は旦那とのことを考えているが、「すごく」と共起して、「とても考える」という意味で、動作の反復を表している。一方、(49)の浅岡は平塚のことを見て、この間は彼はずっと考え込んでいると述べており、(50)～(52)も同じく、考える深さを修飾して、そ



の深さの程度を表している。また、(50)(51)の「ひどく」は第三者のことを言う場合に使われる。それに、話者が他人のことを描いているため、「ようだ」や「そうだ」など相手のことを推測している表現と係っているのが多い。それに考える主体の悩んだりしている様子が暗示されている。(52)の「えらく」は話者が相手の考える様子に驚いた、あるいは不思議に思っているというニュアンスが含まれている。

次は、人称性から見てみよう。工藤(1995)は内的情態動詞を〈思考動詞〉〈知覚動詞〉〈感覚動詞〉〈感情動詞〉と下位分類している。「思う、考える」「感じる、におう」「痛む」「悩む、喜ぶ」はそれぞれの種類に属している。また、内的情態動詞ではスルーシテイルの対立を外的運動動詞のように純粹に時間的なものだとするわけにはいかないと指摘している。内的情態動詞において、シテイルやシテイタ形式は人称性から解放された確認・記述文となる。この点は外的運動動詞と同様である。これに対して、スル(シタ)は基本的に一人称に限定される。吉永(2008)も、心理動詞のル形はどの人称でも安定性が欠けて、タ形はやや安定するが一人称は容認できても二・三人称はほとんど許容されないと述べている。工藤(1995)は、内的情態動詞において、スルーシテイルは次のように対立すると述べている。

スル	1 人称	態度表明／感情・感覚表出(現在)
シタ		体験的確認・記述(過去) 感情・感覚表出(現在)
シテイル シテイタ	1・2・3 人称	(客観的)確認・記述

- (53) 「金返せー！」って叫びたくなるような情報を落として  
すごく腹が立ちました。 (Yahoo!知恵袋)



- (54) ノルトハイムの夫婦が酔っぱらいたちにすごく腹を立てていた。

(ロルフ・ヴィルヘルム・ブレードニヒ『悪魔のほくら』)

- (56) 僕は電気椅子に縛りつけられたまま死刑の執行を先延ばしされたような、ひどく落ち着かない気分になった。

(鱧余夢紋『メガネをかけた犬』)

- (57) 「じゃ、行くか」受付で名前を記入してエレベーターに乗りながら、私はひどく緊張していた。

(吉川精一『月曜日のカーネーション』)

以上の例文から見れば、「すごく」「ひどく」は感情動詞と共起する場合、一人称や三人称でも使われる。(56)(57)のような、一人称で描かれた小説でも、語り手が自らを事態から抜け出し、傍観者としてより客観的に事態を把握するため、「ひどく」が使われてもかまわないと思われる。

### 3.3 程度性のある静態動詞

動詞の中には、動作や動きなどの動作性のないものがあり、形容詞に似た働きを持っている。それらの形容詞は工藤(1995)は静態動詞と呼び、杜(2010)はさらに静態動詞が程度性を有するかどうかによって、程度副詞「とても」と共起する基準になる。

- (58) いろいろなスラングを知っておくのはすごく役に立ちますよ。  
(Yahoo!知恵袋)

- (59) 「ココ」と「過去」がどんな配線で接続されているかで、「ココ」の成り立ちは人によってすごく違う。

(田口ランディ(『旅人の心得』)

- (60) 親子三人は、珍らしく円タクで帰ることにしました。都電では、茂樹がひどく目立つからです。ぼくと妻が沈み切っているのに引きかえ、烏天狗のような顔をした茂樹

は、円タクが嬉しくて大ハシャギです。

(尾崎一雄『昭和文学全集』)

(61) シロウズの知っている連邦経営部の幹部たちとこの男はどこかがひどく違っていた。(光瀬龍『たそがれに還る』)

(62) おそろしく澄んだ黒眸は深い井戸の底を覗くような気分させる。(松井今朝子『銀座開化事件帖』)

(63) 弱冠十九歳のボクは、渋谷のカラスを見ながら、この時恐ろしく間違った結論に達してしまう。「女は聖なる存在なんかじゃない、女の子なんて、くだらんよ」

(大槻ケンヂ『のほほん雑記帳』)

(64) 鋼鉄の針は非常に優れている。弾力があり、利用度は高いが、水に浸すことで錆が生じ、目づまりをおこすので、現在使っている人は少ない。(中野長四郎『刺青の真実』)

杜(2010)も指摘しているように、工藤(1995)の静態動詞に属する存在動詞「ある」「いる」や空間的配置動詞「聳えている、隣接している」などは程度性がないため、程度副詞と共起できない。また、

(65) 自立支援といっても、お金で解決する問題でもないし、人間って、精神面での影響がすごくあると思うんです。

(牧坂秀敏『ヘルパーにもいわせて!』)

(66) そういう意味での参究塾の存在意義っていうのはすごくあると思いますね。

(橋本法明『生きなおしたいあなたに』)

(67) 舞台を見て、一つの意匠が明らかで、つまり、この集団がこの意匠をつくっているなど、それが見えるときというのは、やはり集団を持っている価値がすごくあると思うんですね。

(野田秀樹・長谷部浩『定本・野田秀樹と夢の遊眠社』)

(68) 勝手に利用されるだけでなく、知らないうちに犯罪に加

担しているということもまた事実となりますので、これは非常に問題があると言えるでしょう。

(新井悠『ネットワークセキュリティ expert』)

(69) a 林檎がたくさんある。

b 林檎が?すごく／\*ひどく／\*おそろしく／\*非常に／\*  
ばかりにある。 (作例)

(65)～(68)の「影響がある」、「意義がある」、「価値がある」「問題がある」というのは程度性のある質・状態である。また、(69)から分かるように、これらの語は存在動詞「ある、いる」を修飾し、単に物の数量が多いことを表さない。したがって、静態動詞においても、これらの語は程度性があるものしか共起しないと考えられる。

程度性がある静態動詞：

役に立つ、違う、異なる、目立つ、影響がある、優れている、似ている、似合う、はっきりしている、しっかりしている…

#### 4 まとめ

本章は程度を表す場合、本稿の研究対象と共起する動詞を明らかにして分析した。その結果を以下のようにまとめる。

- ① 本稿の研究対象は副詞形で、発話動詞・思考動詞・知覚動詞と共起する場合、「～と」あるいは「～ように」と解釈される場合は程度を表さず、形容詞連用形とすべき場合がある。
- ② アスペクトから見れば、本稿の研究対象は進展性に限界を持たない動詞、内的情態動詞、程度性のある静態動詞と共起する。

## 第4章 形容詞の程度副詞的用法と通常の程度副詞

### 1 程度副詞の分類から

工藤(1983)は程度副詞を「〈種々の形容詞(いわゆる形容動詞を含めて言う)と組み合わせるのを基本とする〉という形式一文法的特徴をもつ」と述べ、また、程度副詞を以下のように分類している。

[ほぼ疑いなく程度副詞とされる代表的なもの]

非常に 大変(に) はなほど ごく すこぶる 極めて  
至って とても/大分 随分 相当 大層 かなり よほど/  
わりあい わりに けっこう なかなか 比較的/すこし ち  
よっと 少々 多少 心持ちやや

[他のモノゴトとの比較性のつよいもの]

もっとも いちばん/もっと ずっと 一層 一段と ひとき  
わ/はるかに よけい(に)/より

[程度概念に近いもの]

量程度—たくさん いっぱい 残らず たっぷり どっさり  
ふんだんに

概括量副詞—ほとんど ほぼ だいたい おおむね おおよそ  
数量名詞—全部 全員 大部分 あらかた 半分 少数/二つ  
三人 四個/すべて みんな

(工藤(1983:178))

「すこし、ちよっと」のような量性の濃いもの、「もっと、一層」のような累加性のもの、「いちばん、もっとも」のような最上級のものなど使用頻度の高い基本語でかつ性格が捉えにくいこれらの語を除き、程度副詞の大半は事柄的には形容詞の程度を限定しつつ、陳

述的には肯定の平叙の文に用いられるものであると主張している。また、第1章でも述べたように、周辺の・過渡的なものを特徴によって、以下のように分類している。

- a 程度量性の形容詞から：無限に、限りなく、高度に…
- b 目立ち性(主として動詞から)：すば抜けて、際立って、  
人一倍…
- c とりたて性 比較性のもの：とくに、特別に、  
これまでになく…
- d 異常さ 評価性：いやに、ばかに、法外に、極端に…
- e 感情形容詞から：恐ろしく、たまらなく、怖るべく…
- f 真実味 実感性：ほんとに、まことに、実に、全く…
- g 予想や評判との異同：案外、意外に、予想外に…
- h その他：返すがへすも、それは、どこまでも  
(工藤(1983:182-184)、下線部は筆者)

工藤(1983)はその中にはより客観的で状態性の濃いものから、より主観的で評価性の濃いものまでが連続的に存在すると指摘し、「主観的で評価性の濃い」もの、例えば「さいわい、あいにく」などの評価副詞は「多くの場合に文頭(句頭)に位置して、後続のことがら内容全体に対する真偽や予想との異同といった話し手の評価・コメントを表す用法」を持つと述べている(1983:184)。つまり、程度副詞は、程度性と評価性の両面的な性質のあることが明らかにされている。

一方、渡辺(1990)は程度副詞の評価性に注目し、比較構文と計量構文などで程度副詞の評価性、表現性などを分析している。渡辺(1990)における程度副詞の範囲は工藤(1983)の「ほぼ疑いなく程度副詞とされる代表的なもの」とほぼ共通しているが、「程度概念に近いもの」、つまり「(数)量の概念を持つ」量副詞類は程度副詞に含まない、としている。渡辺(1990)の程度副詞の分類は次の表のようである。

	語	比較	計量 <sup>13</sup>	判断構造	表現性	量	評価
発見系	とても	×	○	発見	驚嘆	大	非評価系
	結構	×	○	望外発見	脱懸念	(大)	評価系
比較系	多少	○	○	潜在比較	反期待	小	評価系
	もっと	○	×	比較	吟味	大	非評価系

とても類：はなはだ すこぶる たいへん きわめて ひじょうに  
ずいぶん

結構類：なかなか わりに ばかに やけに

多少類：すこし ちよつと やや いささか かなり

もっと類：ずっと よほど いっそう はるかに いちだんと

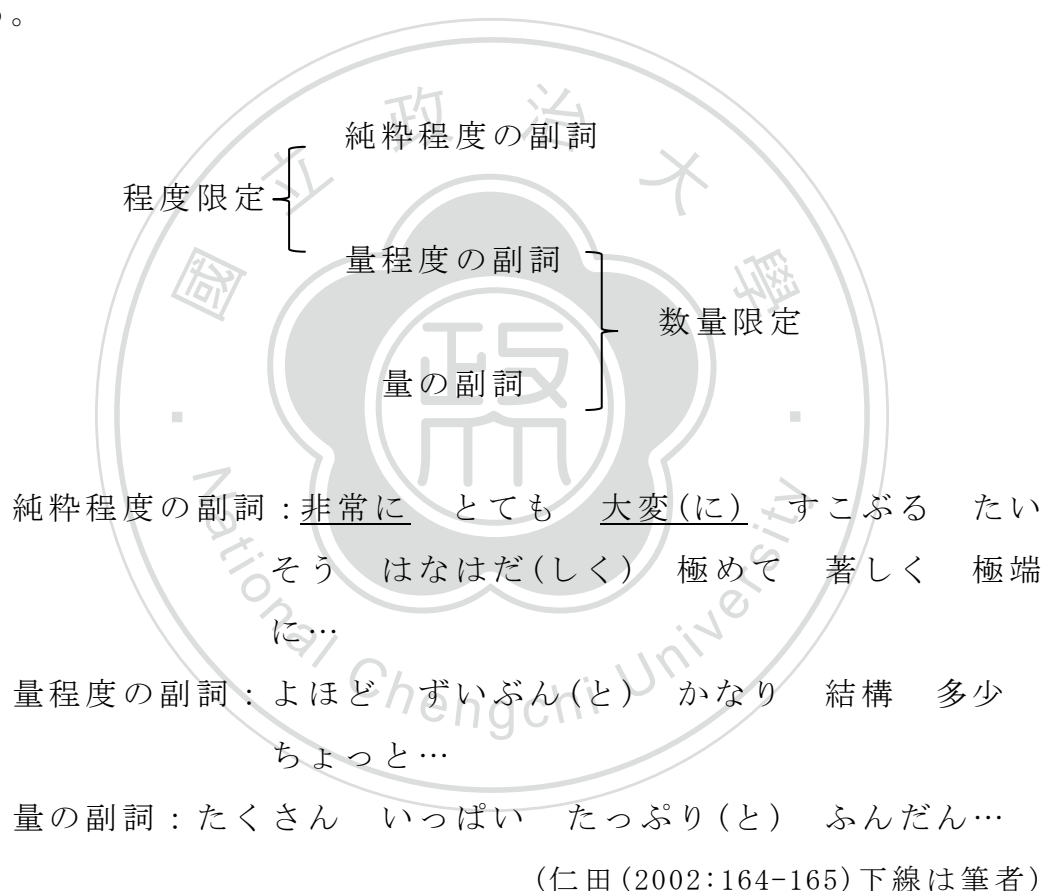
(渡辺(1990:13)下線は筆者)

表を見ればわかるように、渡辺(1990)は程度副詞を「発見系」と「比較系」分けており、さらに「評価系」と「非評価系」と下位分類している。また、判断構造では、「発見系」の「とても類」「結構類」は眼前の客観的な状態を発見し、前者は〈驚嘆〉するという表現性を持つのに対し、後者はある事態に先入観として懸念を抱いていたが、その懸念から解放され、〈脱懸念〉になると述べている。一方、「比較系」の「多少類」「もっと類」は両方とも〈比較〉の概念を含むが、前者は一般的社会常識の範囲内でほかの事柄と比較するのに対し、後者は客観的に二つの事物を比較する、としている。まとめると、渡辺(1990)の「非評価系」は客観的程度限定のものと二つのものを比較するものであるが、「評価系」は工藤(1983)の[ほ

<sup>13</sup> 渡辺(1990)は「とても」の用例から「Xは\_\_A(形容詞)だ」という構文型を〈計量構文〉と呼び、「もっと」の用例から「XはYより\_\_Aだ」という構文型を〈比較構文〉と呼んでいる。

ぼ疑いなく程度副詞とされる代表的なもの]の中から、「非常に」類と[他のモノゴトとの比較性のつよいもの]を除外したものであると思われる。

さらに、仁田(2002)は「命題の内部」、つまり工藤(1983)のいう程度副詞の「ことがらの側面」を研究対象にしている。言い換えれば、程度副詞の「陳述的側面」をあまり取り上げず、程度副詞の程度性と量との関係を分析している。仁田(2002)は程度副詞を純粹程度の副詞、量程度の副詞、量の副詞と分けて、次のような図で表現している。



純粹程度の副詞と量程度の副詞は程度限定することができるが、量の副詞にはそのような機能がない。一方、純粹程度の副詞には数量限定の機能がないことが分かる。また、本稿の研究対象を「移行・派生型の程度副詞」と指摘している。いわゆる移行・派生型の程度副詞は純粹程度の副詞に属し、意味的に大きく〈異例性(異常・例外性)〉と〈評価性〉というにグループに分け、いくつかの語例を取り



上げている。

〈異例性〉: とてつもなく 途方もなく とんでもなく 猛烈に  
やけに 無性に 法外に めっぼう むやみに  
〈評価性〉: いたく おそろしく いやに (ど)えらく すば  
らしく ひどく すごく ものすごく すさまじ  
く ばかに

この分類から見れば、本稿の研究対象はほとんど〈評価性〉があることになる。工藤(1983)は周辺のなものに触れているが、仁田はさらにそれらの語は純粋程度の副詞に属していると述べている。

以上の先行研究の程度副詞の分類によると、本稿の研究対象は工藤(1983)が述べたように周辺の・過渡的なものであり、仁田(2002)のいう純粋程度副詞に属しているが、渡辺(1990)の指摘のように、評価系と非評価系と下位分類することができる。

## 2 形態面からの分析

「とても」は最も無標の程度副詞であるが、陳述副詞的に用いられることがある。

- (1) でもぼくは、三十三才という年齢にして急に記録をのばせたということが、とても重要だと思っている。

(内田勝久『見えないぼくの明るい人生』)

- (2) 暗い長い夜、もうとても夜明の来そうもない夜、と思ったことさえ、幾度もあった。(野尻抱影『ちくま文学の森』)

- (3) とても信じられなかった。だが本の記述は、ごまかしようのない符合をしめしている。(森村誠一『黒魔術の女』)

(1)の「とても」は程度副詞として使われ、重要さの程度が高いことを表しているが、(2)(3)の「とても」は話者の心的態度を表し、

否定表現と呼応して〈どのようにしても～ない〉ということの意味している。そのような「とても」の陳述副詞的用法について、播磨(1993)は明治時代以前は否定後と呼応しない例も普遍に見られると指摘している。そして、明治時代から否定表現を伴い、現代の否定語と呼応する用法と同じものになっているが、程度強調用法が普及しはじめたのは大正時代のことであると述べている。つまり、「とても」の副詞的用法は陳述副詞的用法から程度副詞へと変遷していると言える。

一方、本稿の研究対象の「非常に」「大変(に)」は典型的な程度副詞と見なされ、仁田(2002)も「純粹程度の副詞」と呼んでいるが、形態的には異なるところがある。両語とも形容詞「非常な」「大変な」からなるが、第2章でも述べたように、前者は装定用法の「非常なN」はなく、「非常事態、非常口」などの連体詞のように使われている一方、後者は元々は形容詞であり、副詞形になると「大変に」で程度が高いことを表すが、多くの場合は「に」をつけずに「大変」で用いられている。また、その他の語、例えば「すごく、えらく、ひどく」などは形容詞から副詞になり、さらに程度副詞へと変わっている。ただ、通常の種類副詞とは異なり、本稿の研究対象は程度だけではなく、基本義に引きずられるため、評価やモダリティを表す語も多いと思われる。

このように、本稿の研究対象は同じく程度を表すことができるが、典型的な程度副詞とは形態的に異なるだけではなく、程度を表す副詞になる変遷過程も異なると見られる。

### 3 評価性からの分析

日本語の文は大きく命題(proposition)とモダリティ(modality)という二つの層から成り立っているという考え方は一般に受け入れられているが、研究者によって「命題」を「言表事態」、「モダリティ」を「言表態度」と呼ぶこともある。また、心的態度と言われるモダリティについての分析も研究者によって異なる。その中で、中

右(1980)は副詞のモダリティに言及して、命題の内側にあるものを「命題内副詞」、命題の外側にあるものを「命題外副詞」と呼んでいる。さらに命題内副詞は命題の一部を形作り、それ自体でモダリティを表明することはないのに対し、命題外副詞はモダリティを表明するが、命題の一部にならず、命題内容の増減にかかわることは決してないと指摘している。

仁田(2002)は副詞的修飾成分を〈命題内修飾成分〉と〈モダリティ修飾成分〉とに分け、次のように定義を下している。

命題内修飾成分：命題内で働き、事柄的意味の形成に関わるものである。

モダリティ修飾成分：命題の担い表している事態の内容の減増に関与せず、事態に対する話し手の評価的な態度や認識的な捉え方の程度性や伝え方を表したものである。

1で述べたように、工藤(1983)はことがらの性質と陳述性質という二つの性質を持つ程度副詞は、情態副詞と陳述副詞の間に位置づけられると述べている。工藤(1983)は以下のように主張している。

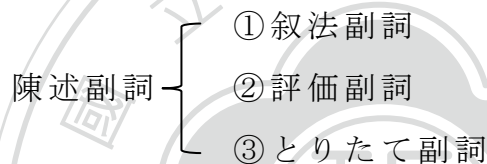
「いわゆる情態副詞(様子や量)がことがらの側面にかたより、いわゆる陳述副詞(叙法や評価)が陳述的側面にかたよる中において、程度副詞は、陳述的に肯定・平叙の叙法と関わって、評価性を持ちつつ、ことがらの性質には形容詞と組み合わせ、程度限定を持つ、という二重性格のものとして位置づけられる。」

また、程度副詞と評価副詞との関係を次のように指摘している。

「コトに対する評価副詞と、サマについての程度副詞とは、形態的にも分化しつつあるのだが、それと同時に、両者は「サマに対する評価」を媒介として交渉し隣接する関係にあるのだと

考えられる。」

さらに、工藤(2000:180)によると、陳述性のうち、副詞あるいは副詞的成分に関係のあるものとしては、①叙法性、②評価性、③対照(とりたて)性の三つがあると思われる。「たぶん、どうぞ、はたして」など推量、依頼といった文の述べ方に関わるものは叙法性の例であり、「あいにく、奇しくも」などは文の叙述内容に対する話し手の評価・感情的な態度にかかわる。また、「ただ、すくなくとも」などは限定、見積もり方といった、文の特定の部分の「とりたて」に関わるものである。こうして、陳述副詞の下位分類は以下の図のようになる。



工藤の主張に従い、本稿の研究対象には文の叙述内容に対する話し手の評価や感情を表して、陳述副詞の「評価副詞」の性質を帯びている語があると言えよう。何故このような性質を帯びているのかというと、工藤(1997)の観点によって推測できると思われる。工藤(1997)は「程度副詞は、程度性の面で文の事柄的内容を豊かにする成分ではあるのだが、その中では最も抽象的で、事柄成分のいわば最も外側に位置するものなのだと思われる」。つまり、文の位置から見れば、程度副詞は命題外副詞の陳述副詞と最も接近しているものである。したがって、程度と評価という二つの機能を持つ本稿の研究対象は典型的な程度副詞より評価性が強く、さらに陳述副詞の性格を帯びるようになると推測できよう。

次は最も無標であり、典型的程度副詞の「とても」を指標として本稿の研究対象と比べる<sup>14</sup>。基本的に、程度副詞は程度を限定する

<sup>14</sup> 前述したように、「とても」にも陳述的用法があるが、ここは程度副詞の用法に焦点を絞ることにする。

別の程度副詞、あるいは比較級と最上級を表す副詞と共起しない。さらに、前述したように、単語の質的側面の基本義が残されれば、量的側面の程度性が低くなるため、程度副詞とすると座りも悪くなり、他の程度副詞と共起性が高くなると考えられる。

- (4) a 花子はとても／すごく／えらく／ひどく／すさまじく  
／おそろしく／大変／非常に／ばかに／いやに疲れて  
いる。
- b 花子が一番\*とても／すごく／えらく／ひどく／すさま  
じく／\*おそろしく／大変／\*非常に／\*ばかに／\*いやに  
疲れている。
- c 花子はかなり\*とても／すごく／えらく／ひどく／すさ  
まじく／\*おそろしく／\*大変／\*非常に／\*ばかに／\*い  
やに疲れている。
- d 花子は太郎より\*とても／\*すごく／?えらく／ひどく  
／すさまじく／\*おそろしく／\*大変／\*非常に／\*ばかに  
／\*いやに疲れている。

本稿の研究対象はすべて動作性のない感覚動詞の「疲れる」と共起し、花子が感じた疲労の程度が甚だしいことを表している<sup>15</sup>。しかし、最高級の「一番」が先行する場合、「とても」と同様に共起しないのは「おそろしく」「非常に」「ばかに」「いやに」である。また、文には一つの述語を二つの程度副詞で修飾するのは不自然であるため、程度副詞「かなり」と共起できない「おそろしく」「大変」「非常に」「ばかに」「いやに」は他の語より程度副詞に近いと推測できる。最後に、比較級の「より」と共起できないのは「すごく」「大変」「非常に」「ばかに」「いやに」である。

<sup>15</sup> 「すばらしく」は語彙的に「疲れる」と共起しないが、「すばらしく優れている」「すばらしく緊張している」などのように、副詞形で述語の程度の高さを修飾することができる。

以上のテストから分かるように、「ひどく」「すさまじく」は形容詞とする基本義が強く残されるため、最高級、比較級と共起できて、他の程度副詞で修飾できる。したがって、仁田(2002)のいう「純粹程度副詞」に属するが、やはり周辺のなものであるため、差異が見られる。それに対して、「すごく」は(4b)の比較文と共起できない。したがって、「すごく」は「ひどく」「すさまじく」より程度副詞に近いと思われる。また、面白いことに、「とても」と同じ典型的程度副詞と視される「非常に」「大変」は3つのテストの結果が一致していない。「非常に」は疲れの程度が高いことを焦点にするが、「大変」は程度だけでなく、疲れるようになる過程、一連性などの事情が暗示されるため、最高級の「一番」と共起するわけである。

一方、「ばかに」「いやに」は「とても」と同様に、3つのテストとも共起しないが、その原因は「非常に」と異なるであろう。「ばかに」「いやに」は陳述性を強く帯びている程度副詞であり、「ね(ねえ)、な(なあ)、じゃないか」などのような話者のモダリティを表す表現とよく共起する。

(5) 女は一度あくびをしたが、「今夜はばかに静かだねえ。お通夜みたようじゃないか」と鼻声で言い、浪人風の男に顔を向けて、「ねえ旦那、そうでしょうか？ 気が滅入っちゃいますねえ」と話しかけた。(多岐川恭『江戸の敵』)

(6) 「いいえ、先生、それは場末の話ですよ、六本木、赤坂じゃ二時間で一万はくだらないそうです。それも昼間の料金で、夜間は二万円…」「いやにくわしいね、さては、よくお世話になっている口だな」

(志賀貢『青春医者のないしょ話』)

何故このような陳述性が強い語は最高級、比較あるいは他の程度副詞と共起しないのか。一般に陳述副詞は文全体を修飾するため、文頭に位置している。したがって、陳述性が強い「ばかに」「いやに」



もそのような特徴を持っている。つまり、(4)のテストのように「一番」「かなり」など他の副詞の後に来て、他の副詞の修飾成分になることはできない。「ばかに」「いやに」だけではなく、「おそろしく」「すばらしく」「えらく」もそのような特徴を持っている。<sup>16</sup>また、同じく評価性がより高いものであるが、「ばかに」「いやに」は他の語とは異なるところがあることは(7)で明らかにすることができる。

(7)a 彼はいつも \_\_\_\_\_ 機嫌がいい。 (作例)

b 彼はいつも \_\_\_\_\_ 機嫌が悪い。 (作例)

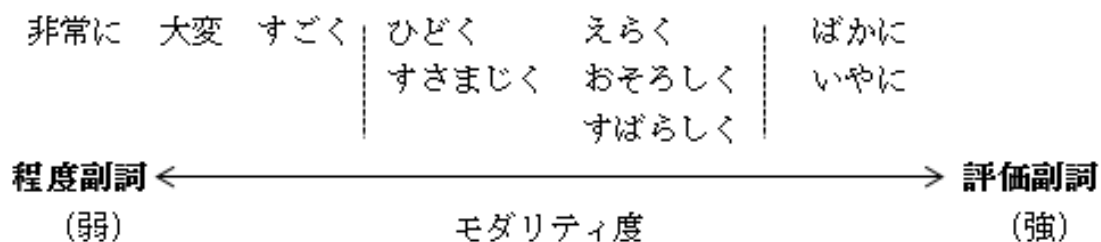
「非常に」「大変」「すごく」は(7)のような始発文の下線部に入れられ、程度が甚だしいと意味している一方、「ひどく」「すさまじく」「えらく」「おそろしく」「すばらしく」は語彙性によって(7a)か(7b)に挿入できるが、基本義が強く残されるため、単に程度を表すだけでなく、話者が主体に対する感情をも表している。しかし、「ばかに」「いやに」は下線部に入れられない。それは「ばかに」「いやに」は話者が事情を見て、その場の驚き・感嘆を表しているため、「いつも」と共起しないと考えられる。

以上の分析から分かるように、本稿の研究対象は程度を表しているだけではなく、多くは評価性も含まれている。また、各語の特徴と共起成分を分析した結果、以下の図のように位置づけられるであろう。

---

<sup>16</sup>工藤(1997)は「おそろしく」「すばらしく」について、「おそろしく巨大なビル」「素晴らしく大きな椿」などの例を取り上げ「もともと事柄全体に対する評価であったものが、形容詞の直前に位置して、事柄の中核のひとつであるあり様に対する評価となり、さらに、その評価の対象面であった程度限定性が表面化しかけているものと考えられるが、「けっこう、なかなか」などの評価性を裏面に持つ程度副詞に連続する」と主張している。





#### 4 まとめ

本章は形容詞の程度副詞的用法と通常の程度副詞と比較して、その結果を以下のようにまとめる。

- ① 「非常に」を除外して、本稿の研究対象は工藤(1983)の述べたように周辺の・過渡的なものであるが、評価性が含まれるのがその特徴の一つである。
- ② 形態面から見れば、本稿の研究対象は典型的程度副詞と異なるが、同じく程度を表すことができるが、変遷過程も一致していない。
- ③ 程度副詞と評価副詞は連続層を成しているため、評価性、あるいはモダリティ度が強ければ、評価副詞に近いと思われる。したがって、本稿では「非常に、大変、すごく」「ひどく、すさまじく、えらく、おそろしく、すばらしく」「ばかに、いやに」と3分類しており、その順で評価性が強くなると考える。

## 第5章 結論

### 1 結論

従来の程度副詞的用法を持つ形容詞は移行・派生型のもの、あるいは周辺のものと視されているが、多くの先行研究は元の形容詞の意味と統語的特徴に触れず、各語の程度副詞的用法の記述にとどまっている。しかし、元は形容詞であるため、副詞形になると元の意味によってそれぞれ異なるところがあると考えられる。したがって、本研究は程度を表す用法を持つ形容詞を研究対象とし、元の形容詞を意味的・統語的に考察して、さらに動詞との共起と通常の種類副詞との相違点について分析を試みてきた。各章の結論をまとめると、以下の通りである。

まず、第2章では、研究対象とする形容詞について考察し、意味的側面から見れば、各語はそれぞれ異なる基本義から〈程度が甚だしい〉という拡張義へと進んでいる。それと同時に、各語の質的側面が薄れ、量的側面が焦点になる。ただし、「ばか(な)」「いや(な)」はその例外であり、量的側面がプロファイルされていないと見られる。また、統語的側面から見れば、各語の基本義は装定用法と述定用法には制限がなく、どちらも用いられる一方、〈量・程度〉の拡張義を表す場合、装定用法で表現しているが、装定用法しか使われない傾向がある。また、〈量・程度〉を表す場合、評価性が含まれているかどうかは装定用法での後接名詞と関わっているが、元の形容詞の基本義を引き摺り、影響が残される場合もあると考えられる。

そして、第3章では本稿の研究対象と共起する動詞について考察した。ただ、副詞形で発話動詞・思考動詞・知覚動詞と共起する場合、「～と」あるいは「～ように」と解釈されれば、程度を表さず、形容詞連用形と視すべき場合があると気付いた。また、アスペクトから見れば、本稿の研究対象は進展性に限界を持たない動詞、内的情態動詞、程度性のある静態動詞と共起していると思われる。

第4章では通常の種類副詞と比較して、「非常に」を除き、本稿の

研究対象には評価性が含まれることがわかる。また、形態面から見れば、典型的程度副詞と異なるが、同じく程度を表す用法を持つても、変遷過程が一致していない。さらに、程度副詞と評価副詞は連続層を成しているため、評価性、あるいはモダリティ度が強ければ、評価副詞に近くなると思われる。したがって、本稿の研究対象は「非常に、大変、すごく」「ひどく、すさまじく、えらく、おそろしく、すばらしく」「ばかに、いやに」と3分類し、その順で評価性が強くなると考えた。

以上の結論から、形容詞とする場合も程度性がかなり高い「すごく」と従来典型的程度副詞と視される「非常に」「大変」を除き、多くの語は副詞になると、元の形容詞の意味に影響されると考えられる。それに、程度副詞は評価副詞とは連続性を持つため、語彙性に強く影響される語は程度性がより低い、評価性がより高くなると考える。

## 2 今後の課題

本研究は形容詞の程度を表す用法を研究対象にしたが、副詞だけでなく、若者言葉の「メッチャ」「超」「マジ」などの語も接頭辞で程度を表していると観察される。例えば、

- (1) 終了後は会場を元に戻し再び商品の処理。メッチャ疲れました。(Yahoo!ブログ)
- (2) めざましテレビの新しいお天気お姉さんの娘、超かわいい！(Yahoo!ブログ)
- (3) ツユは入れるの簡単だからそのくらい良いけど、ネギダクとかマジ面倒。(Yahoo!ブログ)

「メッチャ」は元形容詞の「めちゃくちゃ」「めっちゃめちゃ」の異形態であり、「マジ」は元「真面目」の異形態であるように、これらの語も他の品詞由来のもので程度を表しているが、これらがなぜ程度を表す副詞になるのか、それを今後の課題にしたい。

## 参考文献

- 小野正弘(1997) 「形容詞連用形における意味的中立化」『日本語文法一体系と方法一』ひつじ書房 61-77
- 梶原彩子(2012) 「「偉い」と「立派だ」の意味分析」名古屋大学 第10回日本語教育集会予稿集 22-25
- 片山きよみ・舛井雅子(2006) 「初・中級レベルの日本語教育で教える程度副詞—とても・大変・非常に・すごく・ひどく・本当に—」熊本大学留学生センター紀要 9 25-53
- 金水敏(1989) 「「報告」についての覚書」『日本語のモダリティ』仁田義雄・益岡義雄編 くろしお出版
- 金水敏・工藤真由美・沼田良子(2000) 『時・否定と取り立て』岩波書店
- 工藤浩(1983) 「程度副詞をめぐって」渡辺実 編 『副用語の研究』明治書院
- (1997) 「評価成分をめぐって」『日本語文法一体系と方法』川端善明・仁田義雄編 ひつじ書房
- (2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
- 工藤真由美(1995) 『アスペクト・テンス体系とテクスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
- 坂口頼孝(2010) 「程度強調連用修飾語の品詞の扱い」崇城大学研究報告 35-1 1-12
- 佐野由紀子(1998) 「程度副詞と主体変化動詞との共起」日本語科学 3 7-21
- (2006) 「動きに関わる量について—量的程度副詞と動詞との共起関係から」『高知大國文』37 (左)1-10 高

知大学国語国文学会

- 高橋太郎(1998) 「動詞からみた形容詞」月刊言語 27 3、p36-43  
大修館書店
- 田和真紀子(2011) 「程度副詞の評価性をめぐって」宇都宮大学教  
育学部紀要 61 25-36
- 寺村秀夫(1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 田忠魁・金相順・泉原省二(1998) 『類義語使い分け辞典—日本語  
類似表現のニュアンスの違いを例証する』研究社
- 杜宜衿(2011) 「副詞「よく」の意味用法—類義の副詞との比較を  
中心に一」国立政治大学日本語学科修士論文
- 湯廷池(2012) 『日語形容詞研究入門(上)』致良出版社
- 時衛国(2009) 『中国語と日本語における程度副詞の対照研究』風  
間書房
- 飛田良文・浅田秀子(1991) 『現代形容詞用法辞典』東京堂出版  
—————(1994) 『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 中右実(1980) 「文副詞の比較」国広哲弥編『日英語比較講座 2 文  
法』大修館書店
- 鳴海伸一(2013) 「副詞における程度的意味発生の過程の類型」  
国立国語研究所論集 6 93-110
- 西尾寅弥(1983) 『形容詞の意味・用法に記述的研究』国立国語研  
究所
- 仁田義雄(1983) 「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』  
10 18-29 明治書院
- (1998) 「日本語文法における形容詞」月刊言語 27-3 26  
-35
- (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 播磨桂子(1993) 「「とても」「全然」などにみられる副詞の用法変  
遷の一類型」『語文研究』75 11-22 九州大学国語  
国文学会
- 林奈緒子(1996) 「意味素性による程度副詞の記述」筑波応用言語

- 畠郁(1991) 「副詞論の系譜」『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』 国立国語研究所
- 姫野昌子(1978) 「複合動詞「～こむ」および内部移動を表す複合動詞類」『日本語学校論集』5 47-70 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 増井典夫(1991) 「形容詞「えらい」の勢力拡大過程－近世にみる新語の普及と定着」淑徳国文 32 63-72 愛知淑徳短期大学国文学会
- 松本曜(2003) 『認知意味論 シリーズ認知言語学入門(第3巻)』大修館書店
- 村木新次郎(2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房
- 靱山洋介(2002) 『認知意味論のしくみ』研究社
- 森田良行(1992) 『基礎日本語辞典』角川書店
- (2001) 『意味分析の方法－理想と実践－』ひつじ書房
- (2008) 『動詞・形容詞・副詞の事典』東京堂出版
- 森山卓郎(1985) 「程度副詞と動詞句」『京都教育大学国文学会誌』20 60-65
- (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 矢澤真人(1998) 「日本語の感情・感覚形容詞」月刊言語 27-3 50-55
- 山岡正紀(2000) 『日本語の述語と文機能』くろしお出版
- 山梨正明(2000) 『認知言語学原理』くろしお出版
- Yoshikata Shibuya(2006) “Conceptual Evolution: The Quality-Quantity Continuum in GOOD” 『認知言語論考 No.5』ひつじ書房
- 吉田妙子(2005) 「感情形容詞連用形の副詞用法の制約－「義経は気の毒に死んだ」は何故誤りか－」台湾日本語教育論文集 9 4-32
- 渡辺実(1990) 「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』23 1-

## ツール

現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCJP)

新潮文庫 100 冊

青空文庫

Google

